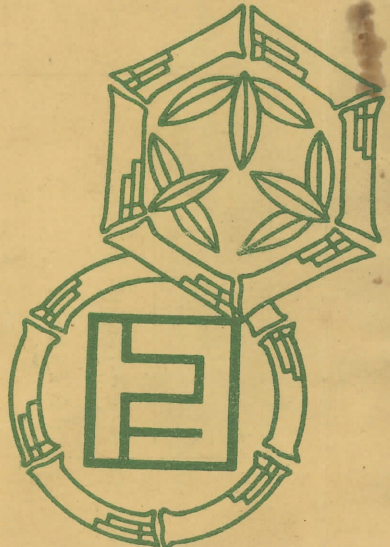


人形操踊

吉野
霜の顔よせ大興行



浪心橋

交楽庭

乍憚口上

紅葉の錦色映えてよろしき季節と相成申候處市中御客様には愈々御機嫌うるはしく遊ばされ大慶此事に奉存候緒而當座に於ては御眞眞様の御後援に酬はゞやと存じ此度より十一月興行を吉例として霜月顔よせ大興行といたし一座太夫三味線人形連中總出演の上にて秘藏の名狂言を數多く組み立て銘々には大役を振り當て、聴きどころ見どころの連續にて御客様の御満足を得るやう當座古來の妙味を出すべきやう相努め申候次第に有之候それが爲めに止むを得ず開演時間を延長いたし候へども之れによつて一層賑々しさを相加え申候まゝ何卒一年一度の大顔よせに是非々々御好評を賜り此上とも御ひるき御引立の程を御願奉申上候

昭和十四年霜月吉日

四ツ橋 文樂座 敬白

昭和十四年十一月一日初日

初日午後一時開演
毎日午後二時開演

・御觀覽料・

一等席 御一名 金三圓

(一階座席五十錢上り)

二等席 御一名 金一圓二十錢

三等席 御一名 金五十錢

(外に各等入場税一圓)
(初日各等約三割引)

一等御座席)は五日前より
一等椅子席)

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南⑦四七壹番
專用電話 南⑦三〇三二番
一般御用 南⑦三七八八番
の電話

お草履の準備は御座りますが、靴、草履はそのまゝ御入場出来ますから御便利で御座ります。



人形浄瑠璃
霜月顔よせ大興行
吉例

太夫・三味線・一人座總出演
十一月初一日
每日午後二時開演
初日午後一時開演

唐女木政右衛門
石房五右衛門
母留五右衛門
乳嫁お倉

吉田文之助
吉田小五郎
吉田文兵衛
吉田文造

唐木政右衛門
唐木政右衛門
唐木政右衛門
唐木政右衛門

吉田文之助
吉田小五郎
吉田文兵衛
吉田文造

伊賀越道中双六
政右衛門屋敷より岡崎の段迄

唐木政右衛門
右衛門敷の段

大内政右衛門
林左衛門
五右衛門
近習

沼津里の段
胡ッ

新關

中切次 鶴豊野竹鶴豊鶴鶴豊
澤竹澤本澤竹澤澤澤竹
清駒吉源和團友叶千
二太太泉伊太駒
郎夫彌夫叶夫三作郎夫

竹藪の段
岡崎の段

基太平記白石断

新吉原揚屋の段
紫紅山人調紅葉狩

中切次 鶴豊豊竹豊豊竹鶴豊
澤竹澤本澤竹澤澤澤竹
清古新相仙伊團寛富
六夫門夫夫糸夫二若夫

宮城野 宮のぶ 宮の野
宗六柴里 宮のぶ 宮の野



維女茂 山神女 腰元

竹豊竹竹竹竹竹竹竹竹
本本本本本本本本本本
呂相生 文源太 源太太
相太太 文源太 源太太



新關の段

竹藪の段

岡崎の段

新吉原揚屋の段

紅葉狩の段

平科姫實 更元 腰元 山腰

吉田文之助
吉田小五郎
吉田文兵衛
吉田文造

傾城 妹房 女屋 大黒

吉田文之助
吉田小五郎
吉田文兵衛
吉田文造

娘和志 田志 幸兵衛 山幸兵衛 唐木政右衛門

吉田文之助
吉田小五郎
吉田文兵衛
吉田文造

唐樓蛇目 木田政右衛門

吉田文之助
吉田小五郎
吉田文兵衛
吉田文造

娘和志 田志 幸兵衛 商女團奴

吉田文之助
吉田小五郎
吉田文兵衛
吉田文造

親服屋 池荷嫁 添持 孫安兵衛

吉田文之助
吉田小五郎
吉田文兵衛
吉田文造

唐木政右衛門 唐木政右衛門 唐木政右衛門

吉田文之助
吉田小五郎
吉田文兵衛
吉田文造

唐木政右衛門屋敷の段

四ツ橋畔
文樂座

電話南四七壹壹番

☆うせまし廢全を品製金☆



國民精神總動員

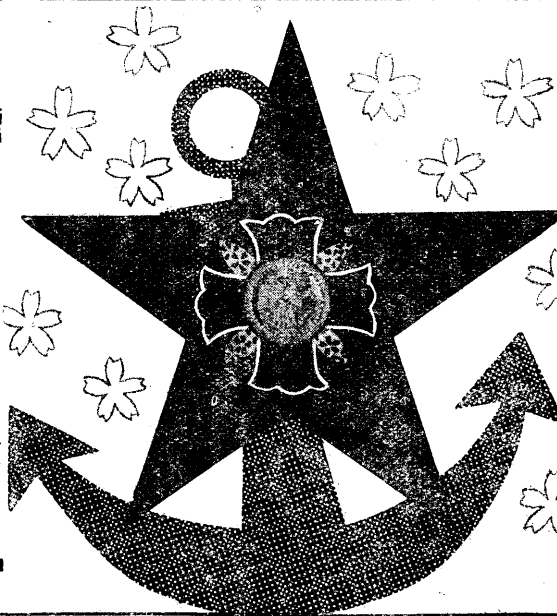


盡忠報國

舉國一致

堅忍持久

國を護つた傷兵護れ



傷兵保護院
國民精神總動員中央聯盟

人形浄瑠璃
吉例 霜月顔よせ大興行

夫木・三味線・一人座總演出

十一月初一日

初日 午後一時開演
毎日 午後二時開演

伊賀越道中双六

(閉幕) 二時〇分
(閉幕) 三時十分
(幕間) 三時十五分

基太平記白石噺

八時卅五分
九時四十五分
十分

新吉原揚屋の段

岡崎の段 六時廿分 八時廿五分 十分

竹敷の段 六時十五分 六時廿分 十分

新關の段 五時卅五分 六時十五分 十分

沼津里の段 四時〇五分 五時十五分 十分

大廣岡の段 三時十五分 四時十五分 十分

唐木政右衛門屋敷の段 二時〇分 三時十分 十分

新曲紅葉狩

九時五十五分
十時廿五分
打出し

紫紅山人調
鶴澤重造
藤間壽右衛門振付



吉例

まんじゅう娘



(1)

唐木政右衛門屋敷の段

中 豊竹千駒太夫
鶴澤友太夫
鶴澤和泉太夫
豊澤團伊三作
鶴澤泉太夫
竹源太夫
野澤吉太夫
豊澤清太夫
鶴澤清太夫

人形

唐木政右衛門
女房五右衛門
石佐見五右衛門
母留柴武助
嫁お柴の倉
乳母おの倉

吉田榮三
吉田文五
桐竹文二
吉田文兵衛
吉田文之助
吉田文之助

伊賀越道中双六

政右衛門屋敷の段
大廣間の段
沼津里の段
新關の段
竹藪の段
岡崎の段

この淨瑠璃は近松半二、近松加作の作で天明三年四月竹本座に初演。その概略は澤井股五郎は渡邊鞆負を殺害して、其所持の一刀を奪て東海道筋を下て逐電した。郡山の唐木政右衛門はこの飛報に義弟のために舅の仇を討つ助太刀をすべく決心し女房お谷を離別したいけな七歳のおのちを後添に迎へるといつた反問苦肉の術策までとり、藩公譽田大内記へ暇を取るべく晴れの試合まで、わざと負けを取つて暇の出るやうに念じ

たが却てその腕前膽力に藩公の重用を促し、眞劍白刃の寸前に眞影の極意を傳授し殿の允許を得て目出度く仇討助太刀に出向く。鞆負の一子志津馬は政右衛門の助太刀を得て仇澤井股五郎の行方を探しまはつてゐた吉原で敵を尋ねまはつた志津馬は瀬川と馴染を重ねた、その瀬川のお米は沼津在の平作の娘であつた。志津馬の破傷風を癒さん爲にお米は日夜心を痛めてゐた、圖らず平作が或る日旅人の荷を擔いだのが縁で二才の時他へ養子にやつた我子重兵衛に廻り合つた、重兵衛は澤井の恩顧をうけたもの、その行方を知つてゐるに相違ない、平作はそれを聞きたさに腹を切つた、重兵衛も遂に股五郎の「落ち付く先は九州相良、吉田で會ふたと人の噂」と人相れず明かした平作の息は絶へたが藪かけにはお米

が孫八と共に聞いてゐた。政右衛門は箱根の關所を越える切手が無いので飛脚助平が遠眼鏡に見惚れてゐる隙にその切手で通り抜けた爲に岡崎で捕手に圍まれた。その危急を助けて呉れたのは眞影流の達人で政右衛門の舊師の幸兵衛であつた。政右衛門の女房お谷は乞食姿になり果て、はる／＼夫の行方を尋ねて來たが義には代えられぬとすげなく追返す。義と人情の柵に勇士烈婦の心境を描いた名作。

(床本) 政右衛門屋敷の段 (中)

昔は山の後なれや今も名のみは郡山家中屋敷もつくろはず直な唐木の柵目有る家の柱は退去りに奥様役の留守預り石留武助は忠義者、常の奉公裏表、内證賄ひいそがしき臺所より腰元共ばら／＼と立出、コレ武助殿

今夜は内方へ嫁御様が見へるげなお目出度い祝言振舞わたしらもあやかる様にお手傳ひに參りました。イヤ御苦勞／＼小身の旦那政右衛門様仲間一人下女一人若黨の此武助が料理人やら家老やら人手がなさに御家中の女中方を御無心、待女郎にも酌人にも各様頼みますイエ／＼同じお給仕でも祝言と開けば氣がしよぎ／＼したが合點の行ぬ事はお谷様といふ奥様お里歸りなされてから開けば去られなさつたげな、がまだぬくもりもさめぬ中新らしい女房を入るとはモ餘りな手廻しサイノ今度の奥様はどこからお出なさるのじやエイ、ヤ我等もかつぶつ存せぬ何だか知らぬが旦那が一人吞込で今夜嫁を呼程に祝言の拵へせいと言付て出られたから何が俄に料理拵へ少斗り開はつた海老の舟盛、置鯉、置鳥などゝいふ

しちむつかしい事は取置鮎の吸物腹合せは新枕の心じやげな、が肝心の鳥臺を忘れて正月のお古を組かへ間に合せたがいかねいものは銚子かへの折形御存じなら折て貰ひたいハテ何の其様に儀式せいででも大事な仲人さへない嫁入今迄どこぞにこつそりと圍て有つた女中で有るホンニあの政右衛門様もお顔に似合ぬ色事師先の奥様はお腹が立ふヲ、それ／＼馴染の女房隙取らして後へ來る嫁づらはどんなお頬じや見てやりたいとさがない女子の口々にうたて

(床本) 政右衛門屋敷の段 (次)

浮名の高話し、うき事の思ひの種を身に持て我内ながら心置く夫の留守を窺ひ足腰元目早くヲ、奥様よふお出なされましたと言ふに武助も押下り幸ひ只今旦那のおるすお歸りなら

ばお知せ申さうまづおゆるりと、あ
しらふ程いと重なるうさつらさ諸
白髪迄と言ひかはした人の心も替れ
ばかはる我内へよふ來たといはれる
ようになつたわいの身に覺へはなけ
れ共親分の五右衛門様どのよふなあ
やまりしたぞ、いとまの印の此一腰
わけが立たねば受取らぬとお屋敷に
も置れねば立よる方もない身の上、
見ればいかふ賑やかながお振舞でも
有のかと問はれてそれとは言ひかぬ
の後先見づの下女はした。今夜はお
屋敷へ嫁御がお入りなされます。ヤ
ア嫁とは誰が嫁、コレ武助もやそ
ふではあるまいと思へど、もし旦那
殿に女房が来るのじやないかやイヤ
其儀はエ、武助殿、かくしてもどふ
で知れる事、政右衛門様のお内儀様
で御座ります。下地からわけのある
事かして、今夜俄の御祝言、私等も

隣り屋敷からお給仕に雇はれました
お前様は先の奥様、てつきりとお妾
に見かへられなされたに違ひはない
ぐつとおりんきなされませと、身に
もかゝらぬ下々の法界悋氣に焚付け
られいと重なる口惜さ包かぬれば
見て取武助エ、コレ女中方役に立た
ぬ事言はずとお臺所に人がない、爐
の炭もついでもらふアイ、合點じ
やサア皆お出で旦那のお歸り待ち女
郎こちらも嫁御の相伴でよい夢見よ
ふと打つれて立て行く間を待兼て、
かつばと伏して泣居たるヲ、お道理
ぢや、したが申し奥様必ず悋氣な
されませすなへアノいやる事はいの悋
氣とは一通りの事、非業の死をなさ
れたと、様、弟、志津馬が敵討の力
と頼むはたつた一人其夫政右衛門殿
縁切れたれば誰を頼みに大敵の股五
郎いつ本望が遂げられふ、力も綱も

切はてしと思へば胸が張り裂るとな
げ、ば共に泣じやくりお氣づかいな
さるゝな、たとへ旦那がどふおつし
やつても拙者めが命にかへても此御
縁は切らしませぬ悋氣なされなとは
その事お前様のおなかにには政右衛
門様の御世繼がござりますぞへ、去
り狀取ふが後づれがは入らふが其お
子さへ御平産なされたれば切ても切
れぬ血筋の縁政右衛門様の奥様と言
ふはおながが證據のお谷様、敵討の
助太刀も頼みの種の人參子サ産み月
に氣を揉であやまち有ればどふなさ
るゝ追付旦那お歸り有らば悋氣がま
しい御顔なされずとかく此内を動か
ぬよふになされませ御合點が参りま
したかア、とは言へ義理の有る女房
去て嫁入の祝言のとは旦那はどふし
たお心じや拙者もいつさい合點が行
かぬ、ほんに此蝶花形、私は折様存

せぬお前様お頼み申ますと言はれて
手には取りながらみすゝ夫を襲取
らるゝ、あた憎らしい蝶花形、大骨
折つて隼の鷹の餌になる春の雉子、
そとに夫の聲聞こへあれ旦那のお歸
りしばらく忍んで御座りませと家來
が情けを力草逢たい夫にかくるゝも
疵持つ心唐紙を押開け忍び入にけり

(床本) 政右衛門屋敷の段(切)

心がけ有る侍は地を這ふ虫も氣を救
さぬ唐木政右衛門伊達を好まぬ刀の
柄前、人に勝れし袴の幅、上屋敷よ
り歸り足、武助手を突きや申し御且
那殊のほかお隙入り御用の品はいか
體の儀でござりましたなサレバム、
此間から辭退する彼林左衛門と武藝
の試み明朝正六ツ時御前において立
合と押付けて御家老の言渡しエ、今晚
妻を迎へまする婚禮の中一兩日お延

し下されとサ願ふてもいかな聞入ず
女房呼ぶは私事明日は延ばされぬと
さりとは心ない家老殿此方は内へ氣
がせくも、尻に成つて漸う只今エ
、祝言の拵へ用意は出來たかア、ヤ
レ、知行取にも飽果た嫁の來るま
で袷脱で休憩せふ、枕おこせ女子共
アイと返事もさし足に角を隠せし塗
枕そつと傍へに奥様を腰元がはりの
見へ隠れ袴は解ど胸とけぬ鋭ひ常の
侍肩衣折てたゝんで取直す詔の種
とは見付た夫ヤイ武助アノ女は何者
じややい。エ、イ、イヤあれは彼
の今日お目見へに參つた新參の女中
でナ、ハイ旦那様お目かけられて
下さりませ。フウ奉公人じやな。見
かけから愚鈍そふなふつゝかな女な
れどマ、遣ふて見てくれふ。コリヤ
ヤイ今夜は身共が女房を呼むかへる
祝言の給仕申付るぞエ、アノ嫁御と

お盃の其給仕をせいとはエ、そり
や餘り、イエサア餘り急な御祝言不
調法な私が給仕得せずば奉公叶はぬ
立て歸れア、イヤ申何でも御意は背
きませぬと下女に成ても夫の内放れ
兼たる心根を察して武助が吞込涙、
ヲ、そふだ、奉公は辛棒が大事何
おつしやらふとナアイ、とそこら
を程よふ鹽梅加減ヤドレお盃の用
意せふと料理をしほに立て行折から
宇佐美五右衛門様御出と案内すハア
又堅ぞふがわせられた誰ぞ羽織持こ
いと言はぬ先から心得て勝手覺えし
女房の徳、氣轉きかして後から着せ
る羽織をひつしよなくエ、子供では
ないはい差出女めあつちへ行と、ね
め付られて是非なくも立間せはしく
入くる五右衛門、彌左衛門裁の袷
こはばり切てづと座し政右衛門殿今
晩は其元に嫁入が有と承はり御祝

儀申に參つた老人の寸志そと御覽下されヤ是は、婚禮を祝しての御發句でかな、先以て忝なしと押開き見て驚き顔フウこりや拙者への果し狀でござるなヲ、サハテ存じ寄らぬ先其意趣の次第はな、しれた事さ、科ない女房なぜ去つたハ、拙者が女房を拙者が去にお手前様が何故の御立腹、イヤサ言まいエ、てや、尤もお谷は上杉の家中和田行家が娘なれどお身と密通して二人連此郡山へ駆込だ流浪の體不便に思ひ且はお手前が器量を見込殿へ申て有付せはサ此五右衛門、其上勘當受けて親のないアノお谷身共が娘分にして改めてお身にくれたれば以前は行家が娘にもせよ、今は身共が娘、少々の見落し有とて去れる義理ではないぞよ、イヤサ、一旦の恩を忘れ外の女房持かへて此五右衛門を踏

付た仕方エ、勘忍ならぬが夫共お谷に據所ない科でも有か、サ、それ聞ふ、返答次第座は立せぬと鏝打叩いて詰かけたりイヤもふ重々御尤千萬がお谷に微塵も科はなし去た仔細は別儀でない、どふ致したか飽ました。イヤモ女房と言ふものは飽てから片時も持て居られるものではござらぬサ、御立腹は御尤が爰をよふお聞きなされ只今拙者と討果されては五右衛門殿、殿へ不忠に成ませふがヤサなぞとおつしやれ明朝御前において櫻田林左衛門と劍術の勝負を致す此政右衛門是まで拙者を推擧なされ明日も既に以て勝負見分の役目を仰付らるゝ其許が拙者をざつぷりと切てお仕舞なされてサ殿へは何と言譯はなさるゝぞ是非憤り晴ぬと有ればハテ何と致そふ武士の因果明日の御前を勤めて其後でお手に

かゝりませふ暫く宥免下されと理に詰められて、さしもの五右衛門ムヤコリヤ尤、意恨は意恨御用は御用、明日までは傍輩の役目中よし、スリヤ御得心下さるかア、忝いハ、酒一献お上り下され追付新しい女房が參るイヤ又其器量のよき雪と墨との替徳、古女房のお谷めは不器量の上因果と早ふ子をはらんで正眞の河豚の横飛、ハ、イヤモ、飽いたを無理とは思し召なと愛想づかしを立開の障子に齒形も入斗り登るつかへを折しも有れ嫁御様早是へヲ、待兼ねた早ふ通せ女子共ソレ燭臺に灯を燈せ烏臺銚子と騒ぐ程五右衛門がむかつき顔玄關より奥座敷直に手操の紙乗物對の箆筒に染込の覆ひも受持介添女房ヲ、大儀、イヤナニ宇佐美公只今彼妻が參つたお祝ひ下され

ア、お目出度儀でござる御推量下さ
れヤ貴公には御退屈コリヤ、あな
たに御酒上げいよア、イヤ拙者御酒
たべると胸が悪くござる是は氣の毒
然らばお菓子イヤサお構ひ御無用ハ
テ堅くろしい何がな御馳走コリヤヤ
イ新參の女何をうるく、まい、くと
其不調法では祝言の酌は得せまいお
客人の肝癢ソレ御春中でも揉で上い
と言ふ程腹の立波に音を泣千鳥四海
波扱我等今晚の花髻結を着る筈なれ
どあたまたから打解る様に角菱止て此
儘の見參サア、早ふ女房共の顔が
見たいヲ、お心安い髻様で、嫁御様
のお仕合せ恥しがつてござらずとサ
ア、お出なされませ、と乗物明れ
ば綿帽子に腰より上は埋もれて七ツ
斗りのいと様御察尺にも合ぬかい取
ほら、帯につられて座敷にとんと
乳母是取て、ア、申其帽子はお盃

の濟まで召してござれア、イヤ、
鬱としからふ取てやりやどれ、戀
女房の御面像とぼろし取らせば尺長
もしまらぬけしの花嫁御直す三方土
器を乳母が持添戴かせ髻君様へ上ま
するア、忝い、女子共皆見てくれ
何とマアちよつこりと何處に置ても
邪魔にならぬよい女房で有ふがな、
ハ、ハ、ハ、ハア嬉しい、目出度ふ
一つ次の間より千秋萬歳の千箱の玉
と謠聲、襟の袖に通取乗せ立出る
ヤアお前は母様柴垣様と驚くお谷に
目もやらず政右衛門に打向ひぐはん
ぜない此娘を女房に持て下さるは此
上の本望なし髻引出の此目録は主人
上杉宇内様より悴志津馬に下されし
敵討御免の御書愈々助太刀なされて
下さるマお心じやないイヤモお尋ねに
及ばず承知致して罷り有るコリヤ新
參の女も能開け身共には先妻が有た

れ共な親の赦さぬ不義密通行家殿の
勘當の娘どれ合夫婦の悲しさは表立
て髻舅といふ事はサならぬぞよ、今
郡山の扶持を戴く政右衛門がよしみ
もない他人の助太刀がサ成べきか、
コレ此おのちはな世間晴れた行家殿
の忘れ形見志津馬が妹に違ひない此
子と今祝言すれば是こそ誠の髻舅、
舅の敵小舅の助太刀、仕ると殿へ御
願ひ申さんにも不届きとは思され
まじ、あなたこなたを思ひ斗つて科
もない女房去つた謂れば此通り、義
理と言ふ色に迷ふて五年の馴染に見
かへた心ヤコレ、波わけて五
右衛門殿御立腹の段々は眞平、ア
、アウ我等ずんぞ酔ました何申すや
らイヤモたわい、と酒に紛らす本
性の言譯聞て手を合せヲ、よふ去て
下さんした其誠をちつとの間も恨ん
だ女子のまはり氣を勘忍してエ、マ

下さんせう、サ身共もよい年をして
 疑ひの悪口ヤモ去りとは面目ない
 ハアあつばれ武士かな政右殿此祝言
 は敵討の門出武士道も立ち家も立つ
 ア、よい嫁を迎へられた扱々目出度
 い婚禮我等も共々お取持と始めの腹
 立打てかへ一度に顔のホ、ア、ホ、
 ハ、色直しハアお心が解けたなれ
 ば彌々かはらぬ政右衛門が後連のお
 後や二世かけてそなたの男今夜から
 抱いてねるぞやコレ女房共〜と言
 へどお後は欠伸交り乳母もういのふ
 とやんちや聲、ヲ、是は娘とした事
 が嫁入早々いんでたまるものかいの
 三々九献まだ濟ぬ殿御の盃戴くもの
 じや、イヤあからはいや乳母あれ
 ほしい、あれとはム、お餓かへホ、
 、、、ヲ、さもしい奥様では有ぞア
 、イヤ〜道理じや〜可愛女房に
 何惜からん併し一つは過る半分は身

が預る是が夫婦のかためぞと持せば
 ぼや〜餓頭えくぼホンニ忘れた嫁
 君の御持參の御道具と箆笥の引出し
 廣蓋に盛ならべたる持遊びの市松人
 形風車七ツに成る子に殿を持せ濟し
 たしやん〜濱松の音はざ〜んざ座
 はかはらねど我夫を夫といはれぬお
 谷が心、思ひやつて居るはいのそも
 じとはなきぬ仲ほんの娘の此お後と
 見かへさした繼母が犂殿に悪性根付
 たと恨んでばしま下さんなア、勿體
 ない事ばかり私が縁の切るのには
 様へ不孝の言譯政右衛門殿いつ迄
 もあの子と添て下さるが家の爲志津
 馬が爲、わしや死るまで去られて居
 るが嬉しいはいのと明し合親子の貞
 心三國一思ひは富士の郡山解て涙を
 汲かはす酒も理に入しめ〜と夜も
 更渡れば稚子が乳母もう寢よふとち
 ゝさがすヲ、此御子わいの七つにな

るまで乳啜へる子が有ものかソレ殿
 御の手前もお恥なされア、イヤ大事
 ない〜是からが新枕、腰元共床を
 取身も追付寝るコレ乳母ソレ女房共
 にし〜やつて寝さしてやりやといた
 はり心付きに乳母のお倉が抱か〜へ
 寝所に伴ひ入れければ政右衛門宇佐美
 が前に手を突改めて五右衛門殿へお
 願申上度様子有りサア〜役には
 立ずと身共も力に成たい何なりとも
 遠慮なふ承はらふサ、どふかエへ、
 〜ハア御深切忝し近頃申兼たれ
 共其許様には明日御前にて切腹なさ
 れて下されいムサ其仔細といつば明
 六ツ時櫻田林左衛門と立合仰せ渡さ
 れし此勝負に拙者負ますすトハまた
 なせなサレバサ高の知れた林左衛門
 打すへるは合點なれど勝ば御前の御
 意に叶ひお暇が出ぬ時は助太刀の望
 叶はず御前に置て此政右衛門ものゝ



大廣間の段

大内記	竹本大隅太夫
政右衛門	竹本文字太夫
林左衛門	豊竹和泉太夫
五右衛門	竹本長尾太夫
近習	竹本常子太夫
近習	竹本隅若太夫
豊澤廣助	

人形

譽田大内記	吉田玉藏
唐木政右衛門	吉田榮三
櫻田林左衛門	吉田玉幸
宇佐見五右衛門	桐竹門造
小姓	桐竹門次
近習	大ぜい

見事に打負けそれを落度に知行差上浪人して思ふまゝ小舅の助太刀致す所存、時には拙者が劍術を吹聴なされた其許様負た我らが恥よりも見損ふた御恥辱よもや生てはござるまい腹なされにや成まい、是迄厚ふ御鼠原下されさま、御恩に預かりし恩を仇と申さふか腹切て下されと申すは五臓の血を一時に吐よりも苦しけれ共舅の敵が討たさ志津馬に本望遂さしたい斗りにか様の不届を申上る御救なされて下されと鬼を欺く政右衛門わつと泣たる眞實に感じ入てム、尤も、命進上申すイヤモ何よりも安い事が只残念なは林左衛門めに恥面か、せんと思ひしに返つて此五右衛門面目を失ふて相果るは悔しけれど貴殿が本望とげたれば其時すゝぐ暫しの無念誠有る侍の爲に皺腹一つが役に立ば身に取て大慶ハ、

、、ヤ、と死るを常の武士氣質アレ聞たか主人に預るお命を我々に下さる、ソレ有難いとお禮申せ女房どもとは言はれぬ表、親子共又言はぬが孝行勝べき勝負を負るも義心、恥辱を取て御最期も侍 同士のお情けと互に禮儀の中々に涙催す八つの袖、時計の七ツせはしなくアレ早勝負の刻限近し身は先へ登城致す用意、有政右衛門貴殿のお暇出るを相圖に身共が切腹御邊は直さま鎌倉へ出立冥途の出立早參る、ハ、ハ、御苦勞後刻と式禮黙禮性急武士の短夜や明る間を待つ最期の門出、いさんで御前へ……

(床本) 大廣間の段

時過て早明六つのしらせの太鼓朝日かゞやく大廣間大内記殿上段の褥に着座成ければ近習の武士各御前に

並び居る、政右衛門は大の竹刀櫻

田は兼てより好む所のさぶり流長柄

を持って待かくる、双方呼吸の透間な

く先を取らんといどみ合切先刃金は

なけれ共、鎗を削る心の眞剣、打合

数は帳面に見る人々も息を詰暫く時

を移せしが兼て期したる政右衛門、

櫻田が槍先をあしらひかねたる手の

くるひしなへがらりと巻落され槍に

腋腹ひざらをうんと斗り面目なふこそ見へ

にける。勢ひ込で林左衛門ム、ム、

ム、ム、エヘ、ム、ム、ハ、ハ、ハ、ハ、

何といづれも御らふじたか影廣言は

誰も言ふたまさか勝負にかゝつては

生兵法が役に立つものではないわき

此様な抜作殿をお取持なされた五右

衛門殿何と只今御合點が参つたかい

エ御合點が参らずば今一勝負仕ら

ふかい何とでござる五右衛門殿ハ、

ハ、ハ、イヤハヤ天晴のお目利へ、ヤ

く嘲弄そしりも覺悟の前、御前に

向ひ、謹で不鍛練の政右衛門を推舉

致せし不調法恐れながら申譯と言も

あへず肩衣刻退差添に手をかくる、

ヤレ待て五右衛門アレ止よ御意じや

切腹先待たれよと近習の聲々、アハ

くくと斗り暫し控へてひれ伏せば櫻

田林左衛門唐木政右衛門兩人共是に

参れハアはつと一度の答へさへ肩で

風切る櫻田と唐木は枯ししほれ枝、

見すぼらしげに蹲るヤイ政右衛門只

今の勝負大内記是にて逐一見届けた

ぞ其方が致し方ホ、神妙に思ふぞよ

と仰にハア、と斗り夢見し心地一座

の不審アイヤサ其方共は今の立合を

何と見た尤勝負は政右衛門負たれ

共、始めよりつくく見るに身構へ

太刀捌ハアよつく鍛し誠の達人林左

衛門が中々及ぶ所ならず彼が心を察

する新参の身を以て古参の者に恥

辱をあたるは武士の情にあらずと

態と勝を譲りしは劍術斗りか心まで

奥床し頼もし、政右衛門を取持した

五右衛門身が爲には天晴忠臣誤りと

思ふべからず又林左衛門事は怪我の

勝をそれとも知らずいかめしく罵る

は我藝の我で見へぬ不鍛練千萬知

行くれるは國の費へ暇をつかはす勝

手に屋敷を立退べしと案の外成る御

上意に林左衛門一句も上らず尖き殿

の御賢慮に恐入たる一家中御前に叶

はぬ林左衛門何をうちく仕召るサ

、早立召れとせり立られしたゝかな

めに大廣間強將の元に弱卒なしと馬

鹿の家來にや馬鹿がなるわい身構へ

太刀捌エ、馬鹿くしいア、此様な

主人を持って居ちや生涯頭のがるた

めしはないドリヤ歸つてくりよヤイ

政右衛門うぬよつぽど仕合せなやつ

だぞよどこぞで必度此返報するウヌ

待ておろム、一人すごく立て行く重ねて政右衛門に言ふべきは新參ながら其方武藝の鍛練感じ入る。二百石加増申付る。黒書院にて改め孟今より一家中の師範と成り彌々忠義を勵んでくれよといと懇ろに仰有しづく御座を御太刀持小姓引連入賜へばぐはらりと違ふ胸算用二人は顔を見合す斗り只うつとりと手を組んで政右衛門殿五右衛門殿ハツハ是ではお暇は願はれまいサア身共も折角切かけた腹がひねに成たコリヤマアどふと腰も抜け一度に溜息次の間より襖をさつと譽田内記槍引提て立出賜ひヤアく不忠者の政右衛門大内記成敗せんそこ動くなと突かけ賜へば扇のあしらひ是が則ち神影の即信ム、尤々是が奥儀の秘事口傳所を突出す左の扇。是又即刀三ヶの大事ヲ、承知く透さず繰出す槍先を兩

手にしつかと拜み請けて突共押共大盤石サ殿得と御傳授下さりませふ政右衛門感心く自然の立合に傳授を放す過分さ大内記満足せり、又今日の致し方様子有んと窺ふところ心底に望み有てわざと我手練を隠し我を謀りし其趣、大内記承知致しておるわい。望みに任せ暇をくれるぞ。ハ、アコリヤ刀を持って、コレ此刀は手覺の不動國行敵討の餞別ではない暇の印ハア不動の文字は動かす動ぜず本意達する吉瑞の御賜、有難く頂戴仕るでハアハ、ござりますム、盃くれよハア政右衛門いつは成ず共今日は一つ呑やれハア看くれふ、一挺の弓の勢ひたり。東西南北の敵を安く亡せりハ、ハ、目出度出立く、ハア行きやれハアと答へて政右衛門其儘御前を立か弓末世に武士の鑑ぞと今の世までも傳へける。

(床本) 沼津里の段 (切)

東路に爰も 三下りうた名高き

沼津の里、富士見白酒名物を、一つ召せ召せ駕籠に召せ、おかごやるかい參らうか、おかごおかごと稻叢の陰に巢を張り待ちかける蜘蛛のならひと知られたり。浮世渡りは様様に草の種かや人目には、荷物もしやんと供廻り、泊りを急ぐ二人連れ、立場と見かけ立止り詞コレハしたり大事の用をとんと忘れた、大儀ながら私が寄つた所まで、一往徒て來てたもと、急ぎの用事走り書き、さらさらと書認め、早うくと手に渡せば、主に劣らぬ達者もの、心安兵衛逸散に、元來し道へ引きかへす。稻叢の蔭より 且那申、お泊りまで參りませうかい。申且那樣、何卒持して下さりませ、今朝から一文も錢の



沼津里の段

切 竹本津太夫
 鶴澤友次郎
 レッ 鶴澤友造
 鶴澤友平
 胡 鶴澤友花
 弓 鶴澤友三

人形

親 平作 桐竹門造
 吳服屋 重兵衛 吉田榮三
 嫁 およね 吉田文五郎
 荷持安兵衛 吉田多三郎
 池添孫八 吉田玉徳

顔を見ませぬ、どうぞお慈悲。といひかけられ、詞イヤ、わしは今夜は夜越に行く、サそこがお慈悲で御座ります。と頼みかけられ是非も無く詞サそんなら吉原まで何ぼぢや。エ、おまへ様も、私が頼んで持つのおやもの、えい程に下さりませ。サそんならやらしやれ、年寄のよしにせいでそんなら持たして下さりませ。チエ、忝ないサアお出でなされませ。ヤツト任せは聲ばかり、一肩往つては立留り、詞アノけふは結構な天氣ぢやな、アヤツトまかせ二肩往いては息を繼ぎ、詞旦那申、向ふの立場に鱧の名所が御座ります、ヤツトまかせと山崎杖する度に追徒口、深田に下りし白鷺の、餌ばみをするに異ならず、見るに氣の毒、詞親仁殿ちつと持つてやりませうかア、それ、危ない、イヤ、勿體ない

勿體ない。ア、氣の毒な足元、最前から見て居るに、氣しんどでならぬこれはわしが足の癖でござります、旦那のお蔭で、けうも内入がようござります。モウこなたもいくつぢや七十に手が届いてござります。ア、ソレ、合點の行かぬ足取。お氣づかひなされませ、若い時は小相撲の一番もとりました。ヤツトまかせとなア、といふ下道の爪先上り氣の根につまづきひよろひよろ、詞ソレ見やしやれエ、きつい事をしたの、親指を蹴かいたか、ヨシ、早速に直してやる。と用意の薬取出し、付けると其儘、詞何とどうぢや痛みは止るが。コレハ結構なお薬でござります、痛みはとんと直りました。サア、御出でなされませ。イヤコレ、荷はおれが持つてやる。ア、旦那様減相な。イヤサ駄賃はや

る、氣遣ひさしやんな、こなたの
足元、最前から危なうて危なうて荷
を持つ方がやつと氣樂な、話しもつ
て行きませう、サア〜ござれと先
に立つ、三下り 平作は千鳥足合しん
どが利になる蒟蒻の、砂に成るか
悲しさに、小腰かゞめて、旦那様
一肩やりませうかい。イヤ〜是で
大分歩きよい、マ、こなたの足元茶
めいた物ぢやの、その足取りを狂言
師に見せたいわいの、亂れなどと言
ふて、傳授事に成りそうな事。イヤ
旦那のおつしやる通り、大概亂れか
ゝつて居りますわい、ハ、ハ、ハ、と
道の伽する笑ひ艸、踏み分けて來る
道草に、菊の折草持ち添へて、見合
はず顔はとゞ様か 詞 およねぢや無い
か、けふは結構な旦那の供したので
荷は持たずにお世話になつた。お禮
申したも。コレハ〜有がたい、

もう爰がわたしが内、暫くお休み遊
ばせと、昔の残り風俗も、尾羽打枯
れし松蔭に、伴ひ入るや西日影。わ
びたる中に二人住、門の柱に印しの
笠、おかけなさるりや庭一杯いつそ
座敷へマアお上りと、親仁が馳走娘
の愛、前垂の藍薄くとも、マアお茶
一つと差出す、こぼれかゝつた藁屋
葺、折悪う湯もわかず、水でなりお
みあしを 詞 ア、イヤ〜もう行きま
する、擬娘御はよい器量、不躰なが
ら此内には、せゝなげに咲いた杜若
よい床へ生けたいのう。ハイどなた
も左様におつしやります、自慢で作
つて置きましたれど、近頃は手入れ
が悪さに、いこふ田地が荒れました
何が身に構はず、賃仕事、貧乏は苦
にもせず、それにそれは孝行にして
くれます、それで私が年寄つての蜘蛛
助も、せめて三文なと肩休めと、

餘りあれがいぢらさで御座ります
コレとゞ様初めてのお方に、其様な
さもしい話を。ホンにさうぢや、ハ
、イヤおよね、けふは大きな怪我
をしてな、コレ〜〜是見よ、爪
が起きてある、ア、薬もあれば有る
ものぢや、あなた様の薬きつい妙薬
ありや何と申す薬で御座りますへ。
此薬は大切な物、第一金瘡には此
場で治る妙薬、武家方には尋ねれど
も、金銀づくでは手に入らぬ妙薬、
と語れば娘は猶ほた〜 詞 とゞ様の
命の親、一日や二日で御禮は云ひも
盡されず、ならう事なら今宵は爰に
逗留遊ばして 詞 マ、娘何云ふぞい、
こんな内に泊めまして、肴は干鯛が
一匹無し、虱より外あなたの身に付
物は無い。イヤ〜不自由は仕付て
居ます、娘御があの方に、しなつこら
しういはしやるので、どうやら爰に

根が生へた、大事なくばいつそ泊めて貰ふかいと目の鞘抜けし商人も、上手な娘のもてなしに、ころりとなればお枕と、油氣は無い眞身の馳走これも一樹の笠舎り、尋ねる軒の目印當に内に入り詞且那是にござりますか、サお立ちなされませんか。ホ、安兵衛か、早かつた、そなたは其荷物を持って吉原の鍵屋で宿を取りや、日和が知れぬ早う行きや、雨具の用意は吉原の、鍵屋をさして急ぎ行く。跡見送つて重兵衛は詞コレ親仁殿此娘御より外にもう子供衆は無いかいの。ハイ此およねが上に、男の子が一人あつたれど、二つの年養子にやりましたが又其の親の手を離れ今は鎌倉の屋敷方へお出入、よい商人になつて居るとの噂、それ聞いとんと思ひ切りました。ソリヤ又何故に。ハテ一旦人にやつたれば

捨たも同然我子乍らも義理あるもの今其伴が身上がよいとて、尋ねて行て箸かたし貰うては、人間の道が濟みませぬ、今出逢ふてもあかの他人子と云ふは此娘一人。ム、それも尤も。其兄貴は今いくつ位ぢやの。ハイかうつ、恰度今年二十八、鎌倉八幡宮の氏地の生れ、母の名は豊と書付け、守袋に入れてやりました、その後このおよねを生んでかゝも相果て、即ちけうが命日で、孝行嬢が水手向け、花の立て方ごろちやつて下りさせと、何心無き話の合紋、一々胸にこたゆる重兵衛、思ひ合はせば覚えあり。扱は産の親父様、血を分けた我妹が貧苦の有様、有合はせた路用の金、なま中親子と名乗つては、受けぬ氣質を何とがな、金のやりたい屈托に、胸を痛めて詞コレ親仁殿、何んと物は相談ぢやが、

此娘をわしに下されぬか。エ、奉公にあげますのか。イヤテヤ未だ女房のない男、利發な娘御、商人の婢には極上々の羽二重地、得心して下さるなら、仕こしらへはこつちから、旅商人のことなれば、よびむかへる日限は、まだいつも定められぬ、嫁入りのこしらへ料、爰に少々持あはず、是をおいて行きます、得心かいの、どうぞござんす、コレ女房面目無いが最前から、わしやこなさん惚れたわいのと、しな付きかければついと退き詞と、様あの方もういなして下さんせ、いかに貧しう暮して居るとて、あたなめすぎた阿呆らしいと、打つてかはりし腹立顔詞エ、たしなめよい女房と言はれるが、何のそれ程腹が立つ事、我が器量がよい故ぢやと、おりやうれしいイヤ申し貴方様、よう御親切に惚れ

さつしやつて下さりました、ぢやがこのおよねは、女房といふては、やられぬ譯がござります。ム、そんなら御亭主があるのか、これは、イヤ實は只今のはほんの座興、主のある人共存せず、龜相申した、眞平御免にあづかりませう、コレ娘御、機嫌直して貰ひましょアノ痛み入つたお詞、ほんに思へば在所者を、おなぶりなさるを眞受にして、お恥しやとにつこりと、笑ひに心打解けて話に紛れてすつぷりと、日の暮れてあるに氣がつかなんだ詞 三日月様が上つてござる、宵月夜で行燈は入らぬ、御燈明を伽にして、辻堂の雨舎り、お客様もうお休み、足延すと壁につかへる奥座敷、ゆるりとちぢまつて、御寝なりませ、わたくしは此臺所、コリヤ娘はそちらに寝い、且那様はお小さいけれど、時のはづみ

では、主のある池へふんどみなさりよも知れぬ。用心には網を張れぢや今夜はおれが股引はいて寝や、寒けれどあなたには、わしがどんざを裾になと、追風もて来る鐘の聲、いとしん／＼と聞えける。およねは一人物思ひ、心にかゝる夫の病氣、我手で介抱する事も、浮世の義理に隔てられ、秋の螢の消え残る、佛壇の灯も細々と、嵐にふつと氣のつく娘詞 奇妙に治つたと、様のあの疵、今でも敵の手掛りが知れてから、あの病氣では思ひもよらず、ム、と心で黙頭き胸を据へ、灯の消へたるは天の與へ夫の爲と拔足差足探り寄り、印籠取り上げ立退く足、蹟く音に目覺ます重兵衛、思はず高聲、何者と、裾を捕へて引きとむれば、わつと泣き入る娘の聲平作も惘りし、起上つても眞暗がり、およね／＼と云ひつ

まさがす籠の埋火、附木にうつし顔見合はせ、娘ぢや無いか。且那樣か何故に此の有様。エ、何の因果で此様な情無い氣になつたぞいやい、コリヤ此親は其日暮しの者ぢやけれどな、人様の物もじきなか盗もと云ふ氣は出さぬわいやい。エ、親の顔迄穢し居つたと、わつと斗りに泣き居たる。重兵衛は氣の毒顔詞 金錢を取つたと云ふでは無し、是には譯の有りさうな事と、問はれておよねは顔を上げ詞 恥かし乍ら聞いて下さりませ、様子有つて云ひ交はせし、夫の名は申されぬが、私故に騒動起り、其場へ立合ひ手疵を負ひ、一旦本腹有つたれど、此頃は頻りに痛み、色々介抱盡せども効無く、立寄る方も旅の空、此近所で御養生、長しい間に路銀も盡き、其貢に身の廻り、櫛笄まで賣拂ひ、悲しい金の才覺

も、男の病ひが治したき、先程のお話しに、金銀づくでは無いとの噂、燈火の消えしより、あの妙薬をどうがなと、思ひ付しが身の因果、どうぞお慈悲に是申、今宵の事は此場切お年寄られしお前に迄、苦勞をかけし不孝の罪、けふは死なうか翌の夜は、我身の瀬川に身を投げんと、思ひし事は幾度か、死んだあとでもお前の歎きと一日ぐらしに日を送る、どうぞ御慈悲に御了簡と、東育ちの張もぬけ、戀の意氣地に身を碎く、心ぞ思ひやられたり。歎きのはし

て進ぜたいものなれど、是は人の預り物此事は思ひ切らつしやれ、今こなた衆の話しの通り、わしも亦た恩を受けた、サ、其恩を請けた人の爲に、いづれの寺へも苦しうないが、石塔一つ寄進がしたいが、何と世話して下さるまいか、夫は御奇特結構な寄進でござります、何時成り共御世話致しませう、私も來年は嬬が年忌、勸むる功德俱に成佛とやら、是非お世話致しまするで御座ります。どうぞ今度の下り迄、遣はぬ様に頼みます。豫ての願ひに書付も、此内に委しうござると、金一包取出し詞

せ金取上げてコレおよね、詞隨分大事に掛けておきや、夜明迄は間もある、其方も休みやと水入らず、見廻はす傍に落ちたる印籠 詞ア、是は今の旦那のぢや定めて尋ねてござるで有ると、云ふにおよねが手に取つて此印籠は何うやら覺えのある模様、ハテ合點の行かぬ、それは是かと能々詠め 詞ホンにそれよ、是やコレ澤井股五郎が常々持ちし覺えの印籠、ハテ不思議なと平作も、金取出しよく見れば 詞金子參拾兩、此書附は鎌倉八幡宮の氏地の生れ、雅名は平三郎母の名はお豊、コリヤコレ我子に付けて置いた書付。そんなら今のお方は、私が爲には兄様。オ、我が子の平三で有つたかい。そんなら最前からの深切は、夫とは言はず此金を、貢いでくれた石塔代不思議な縁と親と子は、暫し呆れて居たりしが、お

レ姉御、そんならこなさんは江戸の吉原で、全盛の松葉屋の瀬川殿ぢやの。ハイデモよう御存知。スリヤ瀬川殿の夫の爲にムウムウと心の目算思案を極め 詞イヤコレ太夫殿、夫の手疵を治す藥慾しいは尤、それ聞いて

コレ必らず頼んだぞや親子の衆最早夜明けに間もなし、随分無事に親仁殿と、立出れば平作も、必らず御下り待ちまする、姉御さらばとばかりにて、心に一物荷物先へ、道を早めて急ぎ行く。跡に親子は顔見合は

よねは印籠手に取つて、裾はせ折つて馳け出す、詞コリヤ待て娘、コリヤどこへ。どこへとはとゞさん、此印籠を持つてゐる、その兄様は敵の手がより、追掛けて股五郎が、所在を尋ね志津馬様へ尤ぢや尤ぢやが、われでは往かぬ、年寄つたれど此平作、理を非に枉げて言はして見せう吾も續いて後から來い、どの様な事があつてもな、必らず出なよ、敵の所在聞く迄は大事の場所木蔭に忍んで立聞きせい、必らずとも龜忽すな合點か、北海道は廻り道、三枚橋の濱傳ひ、勝手覚えし拔道をと、子故に迷ふ三惡道、轉けつまろびつ走り行く。跡にはおよね身ごしらへ、續いて出でんとする所へ、折から來かゝる池添孫八、詞瀨川様か、孫八殿好い所へござんした今夜爰に泊つた客で、敵の手筋が知れさうな、詮議の

爲に吉原まで、とゞさんが行かしやんした。エ、忝ない、シテ其行先は吉原まではよも行くまい、何かの様子は道にて聞かんと、瀨川に續く池添も、足に委せて三重幕ひ行く。實に人心様々に町人なれ共重兵衛は武士も及ばぬ丈夫の魂、夜深に立ちし獨旅千本松にさしかゝる。オオイ杖を力に息すたゝ。詞申々且那樣ヤレゝお早い足元。ムウ今呼んだはこなたか、あはたゞしく何の用、イヤ只今のお金を、お戻しに參じました。石塔料と名をつけて、大枚の金子參拾兩、其の日暮しの蜘蛛助に、下さるも譯がある、又た請けまするにも譯がある、雖然此金を請けましては、去る人が立たぬ義理がござります、是をお返し申します代りに、あなたにお頼みが御座ります、お聞きなされて下さりますか。

ムハテ一夜さ泊るも何んぞの約束、様子に寄つて頼まれまい物でも無いと夕闇月夜の聲知るべ跡より窺ふ池添瀨川、固唾を呑んで聞き居たる。詞シテ其頼みの様子は。ハイ被仰つて下されませ、此印籠の主の所在を承はりたう御座ります。これを尋ねて知りたいばかりに、様々の流浪致す人、夫故娘も廓を出て憂き艱難是が知れると本望成就、娘につれて私までも、モ、モ、此上の悦びは御座りませぬ、貳拾や參拾の端た錢で露命を繋ぐ私が、死ぬる迄安樂に、暮される程の參拾兩、其金銀にかへてのお願ひ、七十に成つて蜘蛛助がこに叶はぬ重荷を持ち、夫はまだ休みもする、子の可愛といふ重荷は、寝た間も休まぬ一生の、苦痛を助け、薬の名、お前様に親御があらば、子故には愚痴に成る物ぢやと思召し

やられて、願ひを叶へて下さりませ
コレ申旦那様。と血筋と義理と道分
石、分けて血の緒の三界に、踏み迷
ふこそ合道理なれ。親の心を察しや
り詞ム、さう有らう。心底至極尤ぢ
やが、是ばかりは何うも言はれぬ、
おれも頼まれた男づく、其方の人が
大切なら、此方にも亦大切、譬へ又
た所在を聞いても命がなくては本望
が遂げられまい、ソレそちの内に落
して置いた、主の無い印籠の其妙薬
で、疵養生達者になつた其上では、
望みの叶ふ時節もあらう。親仁殿、
サ左様ぢや無いかと、心の掛籠、一
重明けぬ重兵衛が情の詞 詞サ、夫程
お慈悲のある方、逆もの事なら其薬
の持主、イヤサコレ悪い合點、此薬
の持主は、其病人とは大敵薬、參拾
兩の其金、敵の恩を請けまいため、房
したでは無いかいの、此持主の名を

言へば、敵の薬で疵本復、恩を受け
ては眞逆の時、切先がにぶらうぞや
猶且拾ふた薬にして、心置きなう養
生さしたが、よきさうに思はるゝと
聞いて平作感じ入り 詞ア、さうぢや
あつた、エ、御前様は恐ろしい發明
なお人ぢやの、左様開きましては、
申様もござりませぬ、左様なら歸り
ましよ、旦那様おさらばと云ひつゝ、
探つて重兵衛が、脇差抜きとり腹へ
ぐつと突立る 詞ヤア、何んとした
何んとした、コリヤ自害か、何故に
誰を恨んで、勿體なやとらう、涙
驚く娘、聲に手當る池添が、鳴音止
むる響虫、草に食付泣く斗り。平作
苦しき目を開き 詞おりや此方の手に
掛つて死るのぢやわいの、ハテ、
此方と己とは敵同士、志津馬殿の縁
のある、此親仁を殺したれば、頼ま
れた此方の男は立つ、コレ、此上

の情には、平作が未來の土産に、敵
の所在を聞かして下されいの、外に
聞く者は誰も無い、今死ぬる者に遠
慮はあるまい、不思議に始めて逢ふ
た人、何うした縁やら我子の様に思
ふ者何んのこなに引け取らす様なこ
とこの親が、サア此親仁が致しませ
うぞ、是が一生の別れ、一生の頼み
聞かずに死んでは、迷ひますわいの
、コレ、拜みます、旦那様と、
子故の闇も二道に、分けて命を塵芥
須彌大海にも勝つたる、誠の親に初
めて逢ひ、名乗もならぬ浮世の義理
孝行の仕納め 詞何處に誰が聞いて居
まいものでも無けれど、重兵衛が口
から云ふは、死んで行く此方さんへ
の餞別、今はの耳によう聞かつしや
れ、股五郎が落付く先は九州相良道
中筋は參州の、吉田で逢ふたと人の
噂。エ、忝ない、アレ聞



新 關 の 段

口
 豊竹鶴 豊竹鶴 豊竹鶴
 本澤本 本澤本 本澤本
 廣路太 廣路太 廣路太
 二夫若 二夫若 二夫若

奥
 竹本 竹本 竹本
 織太 織太 織太
 太夫 太夫 太夫

竹本 竹本 竹本
 南部太 南部太 南部太
 伊達太 伊達太 伊達太
 竹本 竹本 竹本
 さの太 かの太 かの太
 津磨太 津磨太 津磨太
 竹本 竹本 竹本
 宮太 宮太 宮太
 駒若太 駒若太 駒若太
 豊竹 豊竹 豊竹
 松島太 松島太 松島太
 豊竹 豊竹 豊竹
 土佐太 土佐太 土佐太
 竹本 竹本 竹本
 佐夫太 佐夫太 佐夫太

いたか、イヤ誰も無い誰も無い、聞
 いたは此の親仁一人夫で成佛します
 わいの、名僧智識の引導より、
 前生の我子に介抱受け、思ひ残す事
 は無い詞早く苦痛を留めて下され、
 親子一生の逢ひ初めの逢ひ納め、親
 仁様、平三郎でござります。ヲ
 、兄かい、エ、顔が見たい。ヲ、御尤で
 顔が見たいはいやい。ヲ、御尤で
 ござります。親父様。モウ御臨終
 でござりますぞへ、御念佛を申され
 ませヲ、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀
 佛。と唱ふる十年重兵衛が、
 こたへかねたる悲歎の涙、始終うか
 ぶ池添が、小石拾ふて白刃の金、
 合はず火影は親子の名残り、跡に見
 捨て三重

(床本) 新 關 の 段 (口)

別れ行、藤川の新關と人には云へど

影の郷一村こもる松影に茶屋の娘の
 お袖とて年は二八の後や先まだ内證
 は白齒の娘雪氣いとほぬ寒空に水の
 出花やせんじ茶の佛をだしに參詣人
 黒谷の御上人鎌倉へ下向の道此の山
 中の法僧寺に今日で三日の御逗留御
 符御札のお蔭にて啞が物云ふ韓が治
 る膝行のおばがちよつと立てちよ
 こ。走りの禮參り御禮參りの大勢
 がどんや。どや。茶
 屋の床几に腰打かけ何と太郎兵衛さ
 んきつい人群集じやの扱まあ聞しや
 れ御符のお影で奇妙丁來けぶられつ
 妙ふしぎな事がござるての吉田の宿
 の搗栗屋と云ふ炭屋の子が抱瘡で目
 がつぶれ何が一人子の事故夫婦の衆
 がほつ心して本山の法念様へ本願か
 けて本腹さそと奉加帳を拵へて報恩
 者功德の爲と方々へほり込で頼んで
 見たればマ、聞しやれ、あたまの

鶴澤寛治郎

竹澤團六

鶴澤鶴太郎

鶴澤友太郎

豊澤新太郎

鶴澤友太郎

鶴澤寛衛門

鶴澤吉藏

野澤廣若

野澤彌叶

人形

娘 お袖 桐竹紋十郎

和田志津馬 桐竹政龜

奴助 平吉田玉藏

團子賣 杵造 吉田榮三

女房 お福 吉田文五郎

町人 大ぜい

まん丸こいこわげのないお上人様がぬゝらのヤぬつとおはいりなされたら母親は有難ふて、きもにこたへてアフンと云て悦だといのうけたいな悦びようじやなサアどうでも黒谷様の味がよいと見へるわいのふ何がお十念を請るやら御符を頂くやら其夜からシユ〜〜〜ポント目が明きましたといのう、花火見た様な音じやのふハテ知れた事玉が出て光るのじや物アハ、サア夫れからと云物は吉田中がひつくり返りでんぐり返りとんぼり返り雨蛙やそんな者は出やせなんだがの此山中がお泊り故モ毎日〜の參詣人何とマア有難事じやごんせんかいかいのハテソリヤ其箆の事いのそりや又なぜにサア片一方が黒谷さん片一方は炭屋の子そんなら黒いと黒で縁があるじやないかいの縁なき衆生はどしがなしハ、

、、ヤこちらも、いんでコレ縁のある嬢が焚た御符をば頂きませうと打笑ひエホ、〜ホ、〜ホエホ、〜、、、、ア、、、皆ござれ我家〜。

(床本) 新關の段 (奥)

父の教へを守らざる其罪科の降り積る、雪氣の空もいとひなく姿をやつす和田志津馬敵の行衛知ざれば空しく過る光陰の矢たけに心關所の前、ヤコレ姉様最前より此茶店で待合はす體の人は見へなんだか、イエ〜左様なお方は見請ませぬ然らば暫しと腰打かけ、コレ姉さん、此遠目鏡は往來の慰みか、イエ〜慰みではござりませぬ、私しがと、様は此關所の下役人もし切手なしに抜道を通る人が有ふかと吟味のためにこの目鏡と聞て志津馬が心の當惑、差當つた

る切手の用意、ハテどぶがなと思案
顔お袖は一心志津馬が顔アモよい
男と思ひ初め言ひ度い事も娘氣の口
へ出乗る茶の花香、茶碗ばかりを手
に持て、差出す心の思はくは汲で知
かし目遣ひに志津馬も扱はと心付我
に心をかけしこそ幸ひ切手の手がか
りと心でうなづき差寄てコレお娘、
チと頼みたい事があるが何と聞てく
れる氣か、アイ私もお前にお頼みが
サアどの様な事なりと、頼みとあれ
ば引はせぬエ、忝ない、わたしも
お前故ならばどの様なお頼みでもい
とひはせぬと寄り添ばヤそれ聞て落
付た、何を隠さう我身の上今宵中に
此關所を通らねば我一命にかゝる事
こなたの覺へし拔道を何卒教へて貰
ひたい、死んでも忘れぬコレ頼むと
色で仕かける我身の大事、じつとし
むればしめかはず、袖は人目の關の

門、ヲ、なるほどくれ六つからは通
路ならずそれまでに私が、働きもし
間違へばわたしがお供し立退んコレ
申し必ず氣遣ひ遊ばすなと思ひ合ふ
たる他生の縁、二人が望は二道の一
筋道を急ぎの道中、狀箱刀にくゝり
つけ通りかゝればお袖はよびとめ申
しお飛脚様お休と言へば奴が立
どまり、イヤモ呼かけられて姉様に
恥をかゝしてよいものか、ア、まだ
八つに間もあるべい、ドレーぶくせ
いと腰打かけア、ヤレ、くたびれ
た、ヤ申しお客さま眞平御免なさ
いと言へば志津馬も何氣なふお飛脚
はどれからお立なされしな、ナアニ
身共が拙者かやつがればかちかな、
エ、下拙は鎌倉扇ヶ谷の四ツ辻切通
し夜前濱松泊り、イヤモ日が短くて
漸々こゝまでと聞より志津馬が心當
り欺して問んと傍に寄り扱々お早い

事私共は何として、エ、浦山しい
足元と、話しを鹽に茶の出花、一目
見るより餘念なくお袖が傍にぐにや
く、くとなりヤアコリヤ忝ない
テハ、、、白齒娘のお初穂を一口
吞す氣はないか、コレお娘いつの間
にやらテモまあ大そふ器量を仕上た
な、どうじやいの、コレ、
奴どの惡じやれおかしやれ、そもじ
の姿は一森で春はすらりつと鷲の爪
川柳の越付に色くつきりとしがらき
のヤモ其うつやかさを見てからは正
喜仙せずに居られうかい、それにそ
ちらを山吹とはさりとは連ないどふ
よく茶、ちよつとこちらをマア麥茶
わつちが戀茶を叶へてなら、朝茶か
ら、晩茶まで體を粉茶とはつたい茶
足に豆茶が出来る共ちつともいとは
ぬコレどふ茶わつちが言事茶にせず
と玉露ながら聞てたも、コレ嘘茶な

いぞや、實のこつ茶、是茶くそつ
 茶むかづとこつ茶むけ、茶りとはす
 げないコレどふ茶眞實そもぢにへ、
 、ほの字とコレマれゝらのれの字
 海道往來の此私がそもじをふつと見
 初しも袖の振合せ他生の縁不便と思
 ひ是申しどふぞ叶へてエ、マ、マ、
 、下さりませ是もふくくと取付て牡
 丹の盛りに山蜂が花の露吸ふ如くな
 り、コレイナア奴さんじやらくくと
 そんな事より此様な面白いもの見る
 氣はないかと目鏡の傍へひよつか、
 ひよつかくく助平はうつかりひ
 よかんとさしのぞきハアコリヤなん
 だ、火吹竹の化けものか、尺八見る
 様なもの突付け何の面白いコリヤ面
 黒いわい、ヲ、是れはなア奴さん、
 そりや見よふが違ふて有ふさいだ方
 じやなしに明た方の目でごらふじま
 せ、ナニ明た方、明たのふさいだの
 と目の玉の戸びらは有まいし馬鹿
 くしい、併し美しくいお娘の仰せ
 心を改めさらば一見、エヘン 仕うか
 いハ、ア川の向ふは茶屋町と見へる
 かけ行燈がかゝつてあるな何だ、戀
 をするがやいとし河内屋、君を松葉
 や、おつと、吉田屋、高い山田屋、
 谷底美濃屋、宇治屋、夏見屋、花屋
 堺屋か、ハ、ハ、ハ、ア、藤屋の二階に
 客が大騒ぎをやつて居るはい、エ、
 藝子に太鼓に、舞子に、踊り子、肴
 はきんこに生子にいりこに、數の子
 かヤこいつべら棒にが子好だなハ、
 、ア、コリヤく仲居いやがる酒
 をそふむりに吞すな、どふか見た様
 な女だ、ヲ、そふだ、アリヤおらが
 なじみのおきのだ、ヲ、おきのに違
 ひねへヤイコリヤおきのくやい、
 コリヤものをぬかせくヤイコリヤ
 わりやおらに何と言ふた、わりやコ
 レ申し助平さんへ、お前はアノ口元
 が、可愛らしいと言ふてはなめ、イ
 ヤ鼻筋が通つてあると言ふてはなめ
 目元がしほらしいと言ふてはまたな
 めくくく廻はして大事のく
 奴髪までなめはがして仕廻やがつた
 アノ爰なげじく女め、それに何だ
 おらが見る前で尾籠千萬、よくもお
 らを欺したな、鎌倉で人も知たる澤
 井助平もふ了簡がならないと馳出せ
 しがハアハアア、今のはどこだ何
 だ何にも見へねへコリヤどふだと言
 ふにお袖が差覗きヲ、あれは吉田の
 茶屋の二階爰からは一里もあるとこ
 ろ、腹立なさるだけが損ハ、アヤい
 か様聞けば一里ありか、遠方から恪
 氣するは鞆に耳とらするに同じ事、
 とは言ひ乍ら残念と又差覗きうつ
 になればは幸ひ扱は澤井の家來よな
 と津志馬は邊りに氣を付て狀箱の封

押し切り通奪取り元の如くに直すの
も知らぬ助平一心不亂打眺めヨウ
くくく向ふの方からおかしなもの
が見えるぞ、オーイく

こんどく仕出しじやなけんけれ
ど雪か花かの上白米を、痴話と手
管でさらせて引て情でこねて、し
つぼりと飛んだんご、ヤレモサウ
ヤヤレヤレさてな、白と杵とは女
夫でござるヤレモサウヤヤレヤレ
サテナよがな夜一夜オ、ヤレヤレ
ナ、とくんが上から月夜は、そこ
だよヤレコリヤよい子のだんごが
出来たぞ、オ、ヤレヤレサ、ハレ
ワイサ、テコレワイサテどつこい
さてはな、よいとくくくくお
いととななコレワイサノ、よい女
夫、白と杵の中もよや、お月様

さへ嫁入をなさるヤツトキノ、サ
ロセトコセ、年はおいくつ十三七
つえ、ほんにえ、お若いこの子を
産でヤツトキノサロセトコセく
誰にだかせませふぞえ、おまんに
抱そぞえ、見てもうまそな品物め
そふだよ高砂尾上のえ、ぢさまと
ばさまが箒を手に持、熊手をかつ
いで、めかごさしよいそろ、小松
の枯葉を、さらりと集めて、涙そ
としたれば、上の枝には鶴の巢籠
下の小池にや女龜と男龜が空を眺
めて、こわや松はナ、お目出度松
にて高砂文句も、爰らでとめまし
よ、尾の上かくては盡じと女夫連
御ひいきあつき町々を、弘めなが
らに走り行。

時も違へず關所には打拍子木に助平
が一つ二つ三つ四つ五つ六つなむ三
七つの時代り、大切の此狀箱一時も
早くお届け申さん、關所の切手と紙
入の内をさがせとハテめんよふな南
無三寶、後の茶店で落したか、ドリ
ヤ一走り立出れど、水氣取られし
河童奴、ふなりくくと池水のごみに
逢たる如くにもと來し道へ引返す
お袖は後を見送りて、此間に早ふと
茶店の道具を門内へ運ぶかた手に顔
眺め見あかぬ目鏡の戀男、志津馬は
一心敵の手がより、白齒娘の手を引
て岡崎さして歸りける。

(床本) 竹藪の段

鎌倉の奥女中お里歸りの道中と人目
に見せる鋸乗物、關所の内へ昇入た
り此海道を住家とする蛇の目の眼八
人喰ひ馬に櫻田が手に入れ顔に先に



竹藪の段

豊竹富太夫
鶴澤寛
豊澤廣
若二作

人形

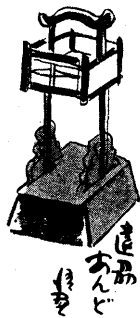
唐木政右衛門	吉田榮三
櫻田林左衛門	吉田玉幸
蛇ノ目眼八	吉田玉市

立コリヤ蛇の目今話した事男と見込で頼むぞよ、何であらふと見付け次第に合點が、エ、親方氣づかひきあんな、此蛇の目が見入れたら一寸も動かしやせぬ、ハテサテ氣味のよいやつと、紙入より取出し金子千疋手渡し、當座のほうび納めて置き、エ、忝い馬士に千匹とは仕合はせ吉の此蛇の目、何で有ふと見付けたら皆撫にする、一チこつばと祝ふさい先、林左衛門、晩の泊りで何かの事しめし合さんサアこいと門内さして入相の鐘もろ共に關の門、門はつしとしむる音、宙をかけたて政右衛門、關所の前に立よれば、門戸かためて、出入もならず暮時でわからねど後姿は林左衛門に違ひなし、スリヤ股五郎を同道には極つた、エ、付け込敵を取り逃せしか口惜やと齒がみをなして、身をもだへ門内を

にらみ付け、無念涙にくれ居たる、ヲ、それよ、志津馬と爰で出合ふ約束但し先へ入込だか、何にもせよ、出合所は一筋道今夜中に此關越ねば最早敵は手に入ぬと、行つ戻りつ思案を極め、兼て聞き居る抜け道は儘に竹の林の中、後をしたふて急ぎ行く。

(床本) 岡崎の段 (中)

世の中の苦は色かゆる松風の音も淋しき寒空や鞍交りに降積る軒もまばらの離れ家は岡崎の宿はづれ百姓ながら一理屈主は山田幸兵衛と人も心を奥口の障子隔て女房が續ぐ車の夜職歌いとし殿御を三河の澤よ、戀の棧、文柱若、更て忍ばづ夜は八ツ橋の水も洩さぬお手枕、鄙も都も小娘の誰教へねど戀草を見初惚初打付て雪の夜道の氣さんじは互に手先持添る



岡崎の段

中 豊竹伊勢太夫 豊澤仙糸 竹本相生太夫 豊澤新左衛門 豊竹古鞆太夫 鶴澤清六

人形

組蛇夜歩捕女唐山幸和娘
ノき手房木田兵田
目廻のお政幸衛志お
眼小右兵女津
子八助頭谷門衛房馬袖
大吉桐吉吉吉吉桐桐
田竹田田田田田竹竹
ぜ紋文文文文文玉政紋十
玉太兵之五榮小兵政十
い市郎次助郎三藏吉龜郎

傘の志津馬にもつれ合ふじやらくら話しいつの間に房のお袖が我家の戸口、ヲ、しんきいつもは遠ふ覺えたに意地悪ふ今夜の早さ、まだ話しが残て有後へ戻つて、下さんせぬか、さりとは譯もない、日は暮る草臥足、後へも前へも雪の段鉢の木の焚火より暖なそもじの肌で暖めて貰ふが御馳走、サ早ふお宿を御無心とぢやれた詞にどふ言てよいか悪いか白齒の娘聲聞付て誰じや、アイノ、か、様わたしじやはいな、ヲ、お袖とした事が、此寒いのに何して居やる、戻りが遅さに待兼た早ふ這入やと母親の詞をしほに内へ入る、とふ歸らふと思ふたけれど道連のお方が有てそれで思はず夜に入りましたム、道連のお方とは、アイ行暮した旅のお方、それはノ、きつひ御難儀今宵一夜はこちの内に留て上て下さ

んせ、申苦しうござりませぬ、こちへお這入遊ばせと呼れて志津馬はおづ、と小腰かゝめて、御赦されませ獨旅の浪人者、日は暮る足は損ふ詮方盡て此お願近頃わりない事ながら一夜のお宿を御無心と言ふも心に荷物葛籠お袖は見るより申、か、様と、様の旅葛籠あそこに戻つてあるからは、ヲ、親父殿もけふ暮前歸らしやつた、旅草臥で、寝てじやわいの、エ、遅ふても大事ないに、早い事やと其後は言ぬ色目を見て取る母日頃から二親がちよつと出ても戻りを案じる孝行なそなた、どふやら不興な顔持は堅い父御の氣質故、折角お宿を借ませふとお供仕やつた道連様へ約束が違ふかと案じ過ての事であらふ、警父御は得心でも此母が不得心、サなせといや、今でこそ茶店の娘、去年までは鎌倉のお屋敷方

へ腰元奉公、御主人さまのお差圖で去武家方へ末々は縁に付ふと堅い約束、其許嫁の夫を嫌ひ無理ひま貰ふて親の内へ戻つて間もなふみだらが

有ては以前の御主ばかりぢやない、顔はしらねど約束した鞆殿への顔

さげて言譯せふ、サア斯いふは言ものゝそなたに限り、そふした事は有まいけれど時分の來た若い娘の有内へ若い男、一夜は愚半時でもひとつ

所に寝伏せば戸は立られぬ人の口、其上連合幸兵衛殿、國守よりのお目がねにて、新關の下役を勤さつしや

る今の身分、常の百姓とは違ふて物を事を正しうするも役柄故、必ず惡ふ聞やんなやと、言れて何と返事さへ

お袖が意見の相伴に志津馬も手持投首を見る氣の毒さ母親もさのみはいかじと何氣なふ、此様に意見するも轉ばぬ先の杖とやら、イヤ申、御浪

人様、お心にさへられて下さりますな泊ます事はならず共せてお茶なと入花を一つ上ふと尻輕に勝手へ。

(床本) 岡崎の段 (次)

行間兼て娘はおづ／＼志津馬が傍サ誰もこぬ間に言残した話しの後を納戸でと取手をすげなく振放し見る

かげもない旅の者に關所での情と言道すがらもあた嬉しい詞を誠と思ひの外許嫁が有からは主ある花に落花

狼藉密夫などと重ねて置てモウ四つに間も有まい夜の更けぬ内宿取て寢て花やろと立上る袂に縋りコレ申有

て過たる縁定め今更とやかう嬢様の今の詞がお心にさはつて私へ當言を無理とはさら／＼思はねど恥しなが

るから思ひ初どふぞ女夫に成たいと胸はしがらむ藤川の關は越ても越かぬる戀の峠の新枕かはさぬ中に胴慾

な情無い事をいふ手間でつい可愛と一口に言はれぬかいなと縋り寄りども涙にかこち言岩木ならねば道にも振捨がたき戀のわなかゝる折柄門

口へいきせき來かゝる蛇の目の眼八お袖は目早く一間の内無理に志津馬を忍ばせて何氣ない顔入口から差覗

いて。ヨウ／＼味いぞ／＼毛虫の親仁や母者は居ずお娘一人はない圖な首尾と這入やいなや後から帯ぎはほ

ふと引だかへコ、／＼、お娘／＼／＼コレマどふじやぞいの／＼／＼常から目顔でしらししてもびんしやん／＼とはね廻る馬よりおれが太鼓のぶち立場で草役見付た様にコレマさ

んばい仕兼て居るわい、やいやかいのふ／＼／＼否なナ風にもヨなび

かんせナヨとけつかるはいハ、ハ、ハ、いや應なしにツイちよこ〜とコレマつるんでおくれとしなだれかゝればエ、きたない、うるさい、いやらしいと突退られても押強くヤモ誰でも初めはいや〜と口では言が腹汁と色事は味覺へてからやめられるものじやないてへ、がへ、ハ、それともいやならおれも意地じや今夜藤川の關所を破つて忍び道を通つたやつ召捕よふと岡崎中は上を下へと詮議のどふ中うさんなやつとの相合傘ちらりとつないだ此眼ハあくて洗ふた蛇の目が詮議ヤほへづらかゝしてこまそふとかけ入向ふへ立ふさがるお袖を突退け立切し障子引明け見て恠りコリヤ違ふたと狼狼眼かけ出す蛇の目が利腕捻上立出る主の幸兵衛百姓なれ共、新關の下役をも相勤むる身共が居間へ泥脚を切込コナヤ狼狼

者めが了簡ならぬやつなれ共所存有故赦しくれる、此以後きつと嗜みおらふと投付らるゝと思ひのほか突放したる手強さに底氣味悪くうち〜もぢ〜見るにお袖が嬉しさと、いとしい人の納りを心一つに兎や角と案じ彌増思ひなり弱みを見せぬ悪者根性お上にどつきり上股打コ、親父殿〜イヤコレ親父殿役目〜といはるゝが其大切な關所を抜た科人を吟味する最中に爰の娘が連て戻つた旅の侍詮議する此眼ハなせしめ上て手込にしたんじやい、ム、娘が連立歸つたとは其侍は何處に居るエ、イヤサアノ慥さつきに、爰の内へヤアだまりおらふ娘にうつ惚れ最前より法外の有條承引せぬ故無法の當推よし又其侍とやらが此内へ來たにもせよ是ぞと言べき證據もな〜侍といへば委く引捕へ關破り

と言べきか勿論、汝は當所の馬追誰が赦しての詮議呼はり長居ひるがはく〜し上げ御地頭へ引立ふかモシ〜去迎はお氣の短いコレ氣の短いイヤモ商賣が馬方だけ豆から起つたいざござで親仁様の寢所まで踏馬御免とへらず口後をも見ずして逃歸る、後見送りて落付娘忍ぶ志津馬も一間を立出覺へなき身に關破りと今の危難をまぬかれしは御亭主の御厚志故忝なしと手をつかへ禮の詞にヤ是は〜痛入先〜お手を上られい、サ、ハ、ひらに〜承はれば御浪人とな定て仕官のお望で上方へござるので有ふイヤ〜様子有て世を忍ぶ獨り旅、則ち當所岡崎にて山田幸兵衛殿方へ密に參る浪人者と聞て不審の眉に皺其山田幸兵衛は身共が事シテ其元は何方からム、スリヤ貴殿が幸兵衛殿かヤ拙者は鎌倉の

昵懇武士澤井城五郎に縁有る者委細は是にと藤川にて手に入一通手に渡せば封押し切て老眼につぶく續くも口の内、様子しらねば氣遣ふお袖幸兵衛とくく讀終りム、某が性根を見込和田靱負を討て立退澤井殿五郎が力となつて呉よと有頼の書面の趣シテ此使を勤らるゝ其許は城五郎殿の御家來かと尋る詞は敵の手筋は幸ひと氣色を正しハア幸兵衛殿の御懇切、承る上からは何をか隠さん某こそ刀の遺恨止事得ず和田靱負を手につけて澤井殿五郎と申者アノ御自分が殿五郎殿か、いかにもヤ是はく存じも寄らぬ是迄互ひに御意得ねば双方共にしらぬ同士コリヤく娘嫁許の鞞殿じやはやいエ、そんなら私が鎌倉へ御奉公の其中にヲ、サ約束致した花鞞殿マよふこそ尋て下されたと悦ぶ聲の洩れ聞

へ母も立出ヤレく思ひがけもないこな様が鞞殿で有たかいの、マ聞たと違ふてよい男コレこの様な鞞殿でもそなたはやつぱりいやかいのふ、ア、勿體ない事言しやんす二世も三世も替らぬ夫モウくいつ迄も爰に居て可愛がつて下さんせと心に思ふ有たけはいはで思ひを押し包むお袖が嬉しさ二親も俱にほたく悦び顔ソレ女房娘稀の珍客何はなく共益の用意をしやれ、アイヤく其お心づかひ却て迷惑ハテ鞞殿の他人がましい勇入やら鞞入やら祝言もごつちやに煎の在所料理みしり肴の船盛より外に馳走は手入ずの娘のお袖が初もの一種でアコレか様又そんな事ヲ、わしとした事があるまりうれしさに思はずしらずついホ、ハ、ハ、ハ、いか様ばどのいやる通り敵持の鞞殿に七十五日生延びるとはヤ是

も吉左右目出たいくドレム案内いたそふとおどけ交りに先に立、親の手まへを恥らいて赤らむ顔の色直しとけて見せても下心赦さぬ志津馬が肌刀胸にねた刃を相の間の襖押し明け入にけり。

(床本) 岡崎の段 (切)

既に其夜もしんくと遠山寺に告渡る早や九つのかねてより内の案内は知たる眼八裏から忍んで納戸口思はず蹟く明がらの駄荷の葛籠を幸とあたふた押明忍び込鼻息もせず窺ひ居る斯とは人も白雪の道も厭はぬ政右衛門心も關の忍び道遁れて急ぐ後よりも數多の捕人が見へ隠れ慕ふ足跡氣轉の唐木兩腰そつと道端の雪かき集め押し隠す隙も有せずばらんく腕を廻せと追取卷ヤア仔細も言はず理不盡に繩かゝるべき覺へはないと

言はせも果ず双方より捕たとかゝるを引はづし苦もなく首筋一掴み一ふり振て右左弱腰蹴すへて狗投隙間を得たりと二番手が腕がらみをふりほどきほぐれを取て眞逆様頭轉胴骨雪道に打付られて叶はじと入かはりたる三ばん手打込む十手かいくゞり脾腹を丁ど眞の當烈しき手練にさしもの組子さうなくも寄付ず後ずさりするばかりなり見かねてかけ寄捕手の小頭ヤア上意によつてむかひし我々手向ひなすは關破りの浪人者に相違はない腕を廻せと詰かくればヤア鹿忽なりお役人急用あつて此如く夜道を急ぐ旅の者丸腰の某を關所を破りし浪人とはヤモ身に取て覺へぬ難題外を御詮議なされよとちつ共恐れぬ丈夫の振舞始終を見届く幸兵衛は戸口をかけ出押隔憚りながらお役人へ申上る關破りの御詮議半深夜に

一人歩行の旅人御疑ひは御尤併し此者は鎌倉飛脚仔細有て此幸兵衛能存じ罷り在れば慮外の段は御用捨有無難にお通し下さらば有難き仕合せと、かばふ詞に政右衛門ムウそいふこなたは何人と言を打消イヤサコリヤ身に覺へないにもせよお役人に慮外の手向ひア、不届至極と呵り付けしづくと歩寄倒れ伏たる組子共引起して死活のいけ、いづれもお心遣にござるかお役目御苦勞千萬と苦い挨拶氣の付捕人幸兵衛も威義を正し承れば關所を破りし科人は帶刀の浪人者彼は町人サ此丸腰憚りながらハ、ヤ人遣へかやうな義に隙取る中彼曲者を取逃さば詮なき事早くお手當なされよと言れて實にもと捕人の小頭ムウ其方が存せしと申詞に相違も有まい是よりは山手へかゝり彼曲者を詮議せん家來まゐれと引

連て元來し道へ引返す影見送て政右衛門ハ、ア危ぶき場所を遁れしも全く貴公の御厚志故がお禮は重ねて、心もせけば失禮ながらお暇申すと立上るを暫しととどめ昨今なれど折入てお尋申すサ仔細も有ば見ぐるしけれど拙者が宅へ暫時ながらと老人の詞に是非なく政右衛門然らば御免と打通れば門の戸引立主の幸兵衛傍近く差よつて多勢を相手に今の働き感心の餘り役人を欺歸し難儀を救ふは身共が寸志がそれに付てもいぶかしきは貴殿の柔術正しく拙者が流儀に同じき神影の極意手練せられし旅人はといぶかる色目こなたも不審神影流の極意なりと見極められし御老人ハテ心憎しと双方がためつすめつ見合はす顔ム、お別れ申て十年餘り相好は變られしが生國勢州山田にて武術の御指南下されし要様では

ござりませぬか、ヲ、其詞で思ひ出した我勢州に有し節幼少より育上し庄太郎で有ふがな成程、然らばあなたが其方がヤ是は、と手を打て盡ぬ師弟の遠州行燈かき立、打ながめヲ、稚顔に見覺有庄太郎に相違はないハテ健に生立しなハア先生にも御健勝でヲ、サ、無事の對面互に満足去なりがらア、思ひ廻せば過行月日其方は山田の神職荒木田宮内が伴なれ共幼少の砌父母に離れ孤兒となる不便さに手鹽にかけて育る所稚立ちより武藝を好むは末頼もしく思ふより門弟共へ稽古の次手一手二手と教ゆる中一を聞て十を知る頓智といひ器用といひ十五以下にて鎗術劍術鎖鎌體術柔術に至るまで諸歴々の弟子を追抜き神影の奥義を極むる無双の達人何卒大家へ仕官をいたさせ親の氏をも繼せんと心頼み

に思ふ中未熟の師匠と見限りしか家出致して十五年便りなければ折にふれ此庄太郎はいかゞなりしと雨につけ風につけ思ひ出さぬ事もなく夫婦打寄りそちが噂シテ只今の住所は何國有付とてもあらざるかと師匠の慈愛に政右衛門思はずはつと手をつかへ親にもまさる大恩の師匠を見限家出せしと御疑ひはさる事なれど常々武術の御講釋小耳に覺ゆる其中に一派に心を凝さんより諸流に渡り修行をなすこそ此道の心がけと御教訓心をしみ渡り十五歳にて國を出普く諸國を遍歴し武術を磨く武者修行天運に叶ひ然るべき主取も致せしかど生れ付たる好色者亂酒に主人の機嫌を損じ只今は元の浪人たよるべき方もなければ、もし上方に有付もやと心ざしてまゐる所思ひがけなく先生に面目なき對面とうかつにそれと身

の上を言はぬ底意はしらがの母、様子聞いてや一間を立出ヲ、庄太郎テモ成人仕やつたの連合の眼鏡に違はぬ武藝の上達器量を見込で頼み度い仔細があると聲をひそめそなたの家出した時は三つ子のアノお袖もふ十七になるはいの縁有て許嫁の其髻殿を親の敵と付ねらふ者が有る故まさかの時の後楯力になつて下さらば餘の人千人萬人にも勝て嬉しう思ひます、ヲ、いかにも、庄太郎と知らぬ先難儀を見兼ね救ひしも其義を頼まん下心と師匠の詞聞きもあへず政右衛門摺寄てムウ其付ねらふ敵の假名はヲ、サ掣といふは上杉の家來澤井股五郎といふ侍付ねらふは和田志津馬とサ聞たばかり面體はしらね共、ヤモ高が知れたる若輩者幸兵衛片腕にも足らぬ相手が爰に一つの難儀といふは志津馬が姉髻唐木政右

衛門といふやつ音に聞へし武術の達人
人譬五十人百人加勢あるとて政右衛
門には及ばぬ、まだしも唐木に立
合はんは其方ならで外にはない何と
ぞ聲に力を添助太刀頼む庄太郎と餘
儀なき頼みに政右衛門ム、先生に内
縁ある股五郎殿に力を添れば少しは
師恩を報ずる理りいかにも助太刀仕
らふサ此上は澤井殿の隠れ家へ御案
内とせき立つ唐木忍びの眼八蓋押明
てさし覗く影をちらりと見付ける幸
兵衛心付ねばヤレ、嬉しや庄太郎
の今の詞聞たからは千人力ドレ聲殿
へと立上るをハテ扱いらざる女の指
出股五郎殿の行術は知れぬナハテ壁
に耳有る世の諺、それと慥にしらね
共云い聞かすには折が有ふがうかつ
にそれと明かされぬ話しの蓋は取ら
ぬが秘密と何處やら一物歩きの小助
門の戸叩いて申、庄屋殿から急な

御用只今お出と、んきよ聲ハア又關
破りの詮議で有ふいやと言れぬ役目
の不肖といひつゝ羽織引かけて嗜む
大だらさしこなす腰もかどみし海老
錠を葛籠にしつかとコリヤ女房今も
言ふた話しの蓋戻つて来るまで明け
ぬ様心におろした此錠前ナ合點かと
詞の謎聞く女房もとけやらぬ雪道い
とはぬ高足駄指傘の骨組も人に勝れ
し岩丈作り歩きを先に幸兵衛は心を
残して出てゆく戻らしやるまで寢ら
れもせまい糸績ながら話しませうハ
ア今に御上根な事マア火にお當りな
されませ私も是から下男同然におつ
かひなされて下さりませ何のいのこ
な様は大事のお客マア煙草吞でゆる
りつと寝轉んだらよいわいの、イエ
、勿體ない師匠の内ホンニ此煙草
はどこから参りましたエソリヤ親仁
殿が旅戻りに貰てござつた上方煙草

ハアあなたのお口に合ふのなら服部
か國分か此天氣に斯して置たら濕り
ましよ、ヤ留守事に刻んで見ませう
幸い爰に切臺庖丁底に劍の葉拵へ敵
を開出す煙草の小口葉巻手早くきり
、と大の體を小廻りの奉公ぶりも
哀れなり、外は昔せでふる雪にむざ
んや肌も郡山の國に残りし女房の思
ひの種の生れ子を抱てはる、海山
をたどり、岡崎の宿より先に日
はくれて、いづくを宿と定めなくが
はと轉ればわつと泣く子をすかす手
も冷氷る雪の蒲團に添乳の枕いんの
こ、に友さをふ犬の聲々夜廻
りの番が見付ける小提灯ヤイコリヤ
ヤイ軒下に何で寝るのぢやサきり
、いけと叱られてハイ、私
は秩父坂東廻る、順禮、癪でおなかを
いためますちつとの間置しやつて
順禮でも幽霊でも在の中に寝さす事

はならぬ〜はい意地ばるは猶うさ
 ん者棒いたゞくなと提灯突つけ見る
 つまはづれの尋常さ白眼だ眼うつか
 りと細目に明る戸の隙間内から覗く
 夫婦の縁思ひがけなき女房お谷ハツ
 と恠り差合せ包む我名の現れ口悪い
 所へ切りかけた煙草の双金胸を刻む
 と人知らずフウ見た所が小盗みする
 風俗共見へぬ此雪に乳呑子かゝへて
 ア、難儀じやあるのふ、どこぞ後生
 氣な所を頼んで泊てもらはしやれエ
 、見れば見る程頃合なえい女房獨り
 寝さすは残念なれど此方も寒氣にと
 ちられ瘦畑の鬼灯であつたらものを
 見遁するとつぶやき歸るも頼みなき
 人の詞もせめての頼み火影を力戸口
 に這寄り幼い者をつれた順禮でござ
 ります、お情に今宵一夜さお庭の端
 にとばかりにて癢にくるしむ息切の
 聲に主は涙もろくヲ、いとしや癢持

そふな、門中に寢てはたまるまい泊
 てしんじよと立て行くなむ三寶と裾
 引き留めア、是は又御廬相千萬此お
 觸のきびしい中殊にお役柄の此内ど
 この者やら知もせぬに、めつたに引
 入後の難はどふなさるゝ、急度よし
 になされませ、夜中に一人歩く女ろ
 くな者じやござりませぬ戸を明けず
 とぼい往したがよござりませ、いか
 様のふ親仁殿の留守の中は用心が肝
 心コレ〜旅人いとしけれど一人旅
 を泊るは御法度御城下の中は軒下に
 も寝る事はならぬ程に宿はづれの森
 の中へ往て寝やしやれと和らかに言
 て引出す糸車こいといふたとて行か
 れる道か道は四十五里波の上、ハア
 どこへ行ても一人旅は泊てくれふ様
 もなし、はる〜の海山も弟夫に
 廻り合い同じ道にと思ふにつけ此子
 の顔も且那殿に見せたいと思ふ精力

で産落すから此已之助漸々忌も明く
 や明かず國を立てついに一夜さ家の
 下で寝た事がなけりや、身はならは
 しと山寺の鐘がなれば寝る事にして
 星の光りをともし火と思ふて寝入ど
 今夜のくらさ氷の様な此肌で寝ぐる
 しいは道理じやはいの、殊更癩で乳
 はゝらず雪にこゝへ雨にうたるゝつ
 らさは骨にこたゆれ共且那殿や弟
 が敵を尋る辛抱はまだ〜〜〜モこ
 んな事ではあるまいに其艱難にくら
 べては雪はおろか劔の上にも寝るの
 がせめて女房の役氣は張詰ても此癩
 の重るに付ては二人の身につかれの
 病が起りはせぬか、萬一悲しい便や
 など聞たら私しや何とせふぞいのふ
 頼み上るは觀世音弟夫の武運長
 久我子の命息災延命、未練な事じや
 が私も此子を、夫に渡すまでは生き
 て居たい、ア、死にともないはいな

く、と傍に夫の有るぞ共しらぬ不便
さくひしはる喉に熱湯内外に水火の
責苦雪霰子を濡さじと抱きしめく、
天道衰れ白雪の積り重なる旅勞れ癩
と寒氣にとぢられて、アツト一聲氣
を失ひどうど倒れし物音は肝にこた
へてなむ、あみだ南無阿彌陀佛も口
の内今のは何ぞと主の母戸を引き明
ればばつたりと身は濡鷲の目はどみ
たり、こりや眩暈がきたのじやはい
のエ、いちらしやコリヤマアどふせ
ふぞいのふく、夫よ幸ひ此氣付
と、とつかは文庫に用意の薬ア、申
しそりや御無用になされませ、なせ
にいの、こりや親仁殿の道中で持し
やつた結構な氣付けサア其結構な氣
付を非人同然の者に吞ましてそれで
も氣の付ぬ時はかより合になります
ぞへ此儘にしてほり出してお仕舞な
されませ、じやといふてどふ見捨に

なる物ぞいのふ、アレ可愛や乳をさ
がして泣はいの、せめて此子を殺さ
ぬやうに奥の炬燵であたゝめてやり
ませふ、風に當じと寝巻の褌袴あか
の他人は慈悲深く比翼とかはす女房
をむごふ引出し戸を引立奥口見廻し
さし足し勝手は見置く釜の前附木の
明り見咎めて人は何とか言柴をそつ
と隠して門の口ふしたる妻に氣を付
る柴の焚火のあたゝまり、嚙しめる
齒を押し割て雪に潤す氣付の一滴耳
に口寄聲かすめお谷といふも憚つて
心の中で呼び生ける夫の誠通じてや
うんと一聲氣が付たか、コリヤく、
女房ハア、ヤアく、政右衛門殿コリ
ヤ何にもいふな敵の在所手がかりに
取付たぞ此家の内へ身共が本名けぶ
らいでも知らされぬ大事の所そちが
居ては大望の妨げ苦しく共こたへて
一丁南の辻堂まで這ふてなりとも行

てくれい、吉左右を知らすまで、氣を
しつかりと張詰めてコリヤ必ず死ぬ
るなサア早ふ行けく、と、夫の詞は
千人力、觀音様のお引合せおまへに
逢たは人參熊膽エ、忝いく、がぼ
んはどこへ、氣づかひすな坊主は
奥へ寢さして置いたソレく、向ふへ
來る提灯見付られな早ふく、とせり
立れど此年月の悲しさと嬉しさとこ
ふじて足立たず杖を力に立兼る、と
やせんかたへに脱捨し菰に積りし雪
の備着せて人目をくらき夜をほか
く、戻る達者親仁ヲ、お歸りなされ
ましたかヲ、ヲ、庄太郎寒いに門に
何して居るイヤお歸りが遅い故お迎
ひに出かける所ナンノ迎ひには及ば
ぬこりや門口に柴のもへさし非人共
が業で有る不用心なと見廻す提灯イ
ヤ私 がと取拍子わざとばつたりコ
リヤ粗相だんないく、きつい風です

でに道で取れふとしたまでも好い所で火が消たといふもこたへる疵持つ足、天氣も大かた上り口庭から足ふく下駄直す師匠思ひに機嫌顔イヤなじみ程結構なものはない是から緩りと夜と俱に話そふかいよ〜最前頼んだ事違變はないのははお師匠共覺へぬ〜どいお尋ね心元なふ思召ならなまくらでない魂を只今金打ア、コレ何のそれには及ばぬイヤ及ばぬとおつしやつてもお頼みなさるゝ本人の股五郎殿の所在御存じないとおつしやるはお師匠の詞に鞘があるかと存じられ頼まれるに力がないナント左様じやござりませぬかと探る心の奥より女房稚子抱き走り出 コレ〜親仁殿最前行倒れの順禮が抱て居た此乳呑子今肌を明て見れば守の中にこの書付け和洲郡山唐木政右衛門子巳之助と書てあるわいのヤアと

幸兵衛立寄て誠に〜シヤアよい物が手に入ただ敵の件を人質に取て置けば此方に六分のつよみ敵に八分の弱味あり股五郎殿の運の強き其がき随分大事にかけ乳母を取て育てるが計略の奥の手と悦び勇めば政右衛門ずつと寄て稚子引よせ喉ぶ〜貫く小柄の切先幸兵衛驚きコリヤ庄太郎大事の人質なぞ殺したハ、此件を留置き敵の鋒先きをくじかふと思召先生の御思案お年のかげんか、こりやちと撻が戻りましたわい。武士と武士との曠業に人質取て勝負する卑怯者と後々まで人の嘲り笑ひ草少分ながら股五郎殿のお力になる此庄太郎人質を便りには仕らぬ目ざす相手政右衛門とやらいふやつ其かたわれの此小倅血祭りに刺殺したが頼まれた拙者が金打と死骸を庭へ投捨たり幸兵衛手を打ちハ、ア尤其丈夫な

魂を見届たれば何をか隠そふ股五郎は奥へきて居るはいの、ばゞ雙殿を起しておじや、コレ〜股五郎の片腕になる頼もしい人が來たと言ふて爰へ呼んでおじやスリヤ澤井股五郎殿は此内に居さつしやるか、フウシテ外に連の衆でもござるか、イヤ〜供もなしたつた一人奥底なふ咄してたもと、打明語るは思ふ壺、何條したる股五郎手取りにするは安かりなんと手ぐすね引て待つ、大膽、志津馬は女房が案内に股五郎が片腕とは何やつなる共只一討と鯉口くつろげ居合腰、氣配り目くばり、互にきつとヤアこなたは〜と一度の仰天幸兵衛むんずと居直り唐木政右衛門和田志津馬ふしぎの對面満足であるふなと、先かけられし二人より思ひがけなき女房が心どぎまぎ不審顔ナント老人の目利よもや違ひは

せまいがの、今宵澤井股五郎と名乗る年ばい格好、聞き及びしとは拔群の相違扱は返つて付けねらふ志津馬か、但し餘類の者か、肌赦させて詮議せんと、わざと一杯くふた顔、三寸姐板見ぬいたれば我弟子の庄太郎が政右衛門といふ事を知つたは漸々たつた今、骨柄といひ手練といひ適れ股五郎が片腕にせんものと頼めば早速承知仕ながら股五郎が所在を根を押して聞きたがるは心得ずと思ひしが子を一抉りに刺殺し、立派に言放した目の内に一滴浮む涙の色は隠しても隠されぬ肉身の恩愛に始めてそれと、悟りしぞよ、澤井にさせる思はなければ娘お袖を城五郎方へ奉公にやつた時、筋目ある人の娘、末々は我家の股五郎と娶合せん、ヲ、いかにとお頼み申すとい言ふた一言が今更引かれぬ因果の縁其後娘は奉

公引て歸りしかど、今落日になつた股五郎、見放されぬは侍の義理、かくまふ幸兵衛ねらふは我弟子悪人に組してくれと頼むに引かれず現在我子を一思ひに殺したは劍術無双の政右衛門手ほどきの此師匠への言譯イヤモ去り逆は過分なぞや其志に感じ入敵の肩持つ片意地も最早や是切り只の百姓町人も侍も、かはらぬ物は子のかはいさ、こなたは男のあきらめ有る、最前ちらりと思ひ合はず順禮の母親の心が察しやらるゝと、悔めば門にたへ兼ねてわつと泣聲内よりも明ける戸直に轉び入、あへ亡骸をいだき上げコレ巳之助ものいふてたも、かゝじやはいのゝ夕べ迄も今朝までもういつらい其中にもてうちしたり藝づくし父御によふ似た顔見差殺すむごたらしいと、様を恨るに

も恨まれぬ、前生にどんな罪をして侍の子には生れしぞこんな事ならさつきの時母が死だら憂き目は見まい佛のお慈悲のあるならば今一度生返り乳房をすふてくれよかしと庭に轉びつ這まはり、抱きしめたる我が身も雪ときゆべき風情なり、志津馬涙を押拭ひ此上は包まんやうなし、とてもものに眞實の敵の所在を何がさて、此方も隠しはせぬ、有様は此幸兵衛最前庄屋へ呼ばれた時、股五郎にあふて来たはい、ヤアすりや敵は庄屋の方に心得たりとかけ出すを、政右衛門引とよめ愚ゝ我々爰に有と聞き暫時も此地に足を留めふ様がない、早五六里も行過ぎて、もふ爰らに敵は居ぬ、此行先も用心して海道筋へはよも行まい、道をかへて落たと見へる親仁様、何と左様でござらふがや、シタリ黒星其通り迎も

非道の股五郎天道の御罰にてどふで

討るゝ者なれ共此岡崎で勝負さすれば

越に中仙道へ落したは城五郎へ一旦

の情、股五郎との縁もこれまで思は

ぬ方便が縁になり、志津馬殿と言か

はした娘が身の果不便やと、見れば

籬の小かげより思ひ切髪墨ぞめのけ

さにかはりしそぎ尼姿お袖かヲ、出

かしゃつた、悪人の股五郎に假にも

女房と名の付た其間違がそなたの不

運、可愛や盛りの黒髪を、ア、コレ

申しもふ何にも申しませぬ顔は見ね

共許嫁の男持のがうるさゝに屋敷を

戻つた其時から、尼になる氣で袈裟

衣、けふ一日に氣が替り染違ふたる

津馬にも縁を放れたお袖道心、袖ふり合ふも他生の縁、子に別れた順禮に菩提の爲のよい道づれ、關役人の我娘關所へも切手いらす中仙道への案内者勝手につれて行れよと、娘に敵の道引きを遣子故に踏迷ふ未來の契り鉦撞木涙で渡す父母のめぐみも深き觀世音、南無阿彌陀佛なむあみだ我子は冥途の道しるべ志津馬唐木も恥合て、しほれぬ表武士の禮師弟は内證敵同士、此儘かへるは卑怯者かへせと一聲切付る、得たりと請る半蓋に馬士の胴切、重ね切眞その通りの手柄を待つ、まだお手の内は狂ひませぬハ、ヤがて吉左右へと笑ふて祝ふ出立は侍なりけり

松竹家庭劇 歸演

十月三十一日初日

毎日ヒル正午二回開演
毎ヨル五時半

第一 お腹の子供 二場

茂林寺文福作

大阪毎日新聞社會記者劇化
茂林寺文福作

高須文七脚本

第二 報 恩 餅 三場

遇信省推型

大隈一俊進作

第三 銃 後 の 家 二場

山上貞一演出

茂林寺文福合作

第四 あきらめの涙 二場

直志脚本

第五 笑話 醉虎傳 二場

茂林寺文福作

尾崎倉三脚本

御観劇料

四等席	金五
三等席	金七
二等席	金十
一等席	金一圓五十錢
椅子席	金一圓五十錢
特等席	金二圓

(他二名等入場税一圓)

どうとんぼり 中座



白を不し
守袋
⑫

こたいへいきしらしいばなし
碁太平記白石噺

新吉原揚屋の段

新吉原揚屋の段

宮城野	おのぶ	宮里	宮柴	宗六
竹本南部太夫	竹本伊達太夫	竹本伊達太夫	竹本伊達太夫	鶴澤友衛門造
竹本南部太夫	竹本伊達太夫	竹本伊達太夫	竹本伊達太夫	鶴澤友衛門造

人形

傾城	宮城野	おのぶ	宮里	宮柴	宗六
桐紋十郎	桐紋十郎	吉田光三	吉田光三	吉田光三	桐紋十郎
桐紋十郎	桐紋十郎	吉田光三	吉田光三	吉田光三	桐紋十郎

この淨瑠璃は安永九年正月江戸外記座に上場されたもので作者は烏亭馬馬、紀上太郎、容楊黨の三人合作。

この段は全十一段の中第七段目でその内容は奥州逆井村の百姓與茂作の姉嬢が貧苦のために江戸新吉原で遊女となり全盛を謳はれてゐると、郷里から妹の信夫が姉を尋ねて来て偶然の機会から姉嬢が邂逅する、姉の宮城野は妹の口から父の横死を知つて敵討ちを決心したが揚屋の亭主宗六から曾我物語を例にして却て懇ろ

に意見されるといふ筋で吉原の眞中で田舎娘に思切つて奥州訛を使はせたのがヤマである。この實説は松平陸奥守（仙臺侯）の家老片倉小十郎

の劍術の師範に田邊志摩といふ者があつて享保三年中白石在で領内足立村の百姓四郎左衛門のために行列を破られたので四郎左衛門を無禮討にしながらこの時四郎左衛門に娘があつて深くこの事を無念に思ひ陸奥守の劍術師範瀧本傳八郎の許に傳手を求めて姉妹共に奉公し六年間劍道を修業し瀧本の助太刀で享保八年仙臺白鳥明神の境内で首尾よく敵志摩を討ち取つたと云ふ物語である。

(床本) 新吉原の段

M 入相の、鐘さへ早く暮れ果て、廓の中は萬燈會、歌舞の菩薩の色揃へ。わけて全盛宮城野が、部屋は上品奥二階、簞筒長持鏡臺の埃取迄綾紗、袱紗なりけるありさまなり。此君の一字なり共次の間から、宮里宮柴打連て。詞太夫様御機嫌わへ、ホ

ソニきつきに貸本屋が参じて、先度の曾我物語の次じやといふて置いていんだぞへ。イヤ申し宮柴様、今日のお客は仲の町の蔦屋から、締からんだ二人一座、宮城野様はもとよりお前も早ふ身仕廻して。オ、せわしな、今身仕廻をするはいな、併し差合な顔はないかへ。イ、エどれも

侍衆、一人のお方は器量よし今一人は髯むつちや、目の大きい熊か人かといふ様な、どちらへ札が落うやら、いやな事ではないかいなと何處の浦も容噺、そしるも廓のならはしかや。詞ア、コレ、そんな事いふて遣手衆が叱ろぞへ。オ、叱つたて、あたおかしい、イヤおかしい次手に、きのふ旦那様が、淺草で抱へて戻らしやんした奉公人、おかしい物いひではないかいな。サイナア遠い國から姉を尋ねて上つたとの話

し、宮城野様の慰みに、連れてきてお目につけて、お前もお出と連立つて行く後かげ見送つて。詞テモ扱も、わざん、獨り物いふて、マアよい氣ではある程にの。コレ、しげり、そなた其處らかたづけやと、いひ付る間もありやなし、新造二人が伴ひに、いやがる者をむり無體、突出されたる田舎の娘、傍きよるきよるつひに見ぬ、錦の小より三つ蒲團、興さめ顔に。詞オヤ、女郎さあ達、人が寝そべつて居る處を、用さア有來とらへと、二階さあぶち上てこりやマア何たる所だ。どこもかも光り申て、お洒落の櫛さあ見る様に、塗こべえた簞笥さア、其上に夜の物も金切たもじやア、蒲團も蘇枋染の色の上さ、私らアねまつたら、あくとの鞆さア引かゝつてうつつ切べい、おやつかなたまげ申す、

と言ければ打、轉る程おかしさかくし。詞コレをこなお子、お前の故郷國所、爰へどうしてお出た譯、話して聞かさんしよば、お力ともならうにと、なぶると知らずしく泣。詞オ、やさしな詞おいやり申す、私ら國さア奥州、だじアやがアまに様子有つて別れ申して、お江戸さあはあらく盛る處だアと聞き、其うへ姉さア此吉原の名高い女郎さアに成つて居さるとのはなし、女わらじの身として敵ない思ひをして、尋ねてくるも、海山物語りの有事、聞いて哀れを添てたべ。詞オ、モ何を言ふじや、すつきりと譯が知れぬ、そして吉原で名高い女中を姉様とは、雲つかむやうな尋ね物。サアそれだから頼み申すは、昨日觀音さアで目眼のおつかない人が、連れて行つて逢はしてやらうと、籠さアに乗せてく

る所を、是の御亭の世話さアに成り申して夕から居申す、脚たしかけ申すも他生の縁、ほんで御座るわよ、赤はらはたれ申さぬぢやア。ホ、聞けばきくほどおかしい話、そして今の赤はらとは、あられもないと若い同士、嫌もくづるゝ高笑ひ。知る人ぞしる宮城野が、押なだめて申しお二人、浪花の葦も伊勢の濱萩、所々ではかる物言ひ。其様に笑はぬ物、詞今あの子の言ふてじや有つた、だゞアやがアまといふはな、爰で言ふとゝ様かゝ様、又赤はらといふてじやは嘘はつかぬといふ事じやわいな、扱つても我折れよふ御存じ。オ、知つたも無理か愛臥は、夜毎日毎にかはる枕、心つくしの果は愚か、奥のとろくのお客にも、馴親しんだ身の一徳。詞オ、其のお客で思ひ出した、奥のお客がやかましかる、私も追付

けそこへ行く、先へお出てよい様にコレ〱しげり、仲の町の井筒屋へ行ての、昨日の返事聞いておじや、早う〱と云ふ下から、遣手の政が例のしやぎり。詞奥のお客のお侍かね、何話して居さんすぞいのう。オ、せはし、そんならわしらも奥へ行て、御客選らみの榮耀もいはず、寝そべる度にア、何やら、オ、それ赤はらたれて氣に入つて、日がら頼もと口々に、いふて座敷へ行くふりを、見やる宮城野しのぶが傍。もしやそれぞと摺よつて。詞さつきにからの話しを聞けば、姉を尋ねる人さうな、奥州はどこらの生れ、何といふ所じやへ。詞アイ奥州は白坂遍在逆井村といふ所。フン其逆井村といふ所に、與茂作といふお人が有らうがの。アイサ、其與茂作といふのはめらしがだゝ。ヤそんならわしが妹

と、縄り寄るを突退けて詞イヤ〱〱、がアまの常にに云はしやるには姉さアの方にもしるしが有る、それを證據に名乗合ひ、委細心底打明ろと、云めした、それが有るなら早うつん出し、見せてくんされ姉さアとなつかしながら油断なき。オ、伶俐な人、疑やるも尤もと、立て箆筒の袋柵、襖開けばうや〱しう、淺草寺の觀世音、扉表具におしならべ、かざり置いたる筒守り、見るに妹も疾し遅し、首にかけまく壺井の守。詞コレ〱〱、此姉が國を出る時かゝ様が大事にせいと下さんした、此守とゝ様は楠家の御浪人故、河内の國壺井八幡様のお守、それを持つて居やるからは、妹じや〱、コレ〱、よう顔見せてたもいのう。オ、姉さアでござるかいの、逢ひたかつたと諸共に、嬉しなつかし縄り

寄り、外に詞も泣く計り。斯ぞとい
 ぞや宮城野が、座敷へ出ぬをふしぎ
 さに、來かゝる亭主宗六が、様子有
 りげな部屋の體、忍んで事を立聞
 とも知らず姉妹ひそく話し。詞オ
 、妹、よう尋ねて來てたもつた、年
 端も行かぬそなた、とゞ様成り、か
 ゝ様なりと、いづれぞ付いてお出で
 あらう、もし道中ではぐれてかと聞
 はれてわつと聲を上げ。詞ア、コレ
 〳〵、斯うめぐり逢ふからは、
 悲しい事も何にもない、泣いては濟
 まぬ、サアどうぞと、尋ぬる姉の心
 もそゞろ。詞エ、遠國隔つた姉さア
 それで何にも聞かないナ、だゝア五
 月田植の時分、代官志賀臺七といふ
 惡侍に、ヤアヤア〳〵何といやる
 打斬れてお死にやり申した。ヤアと
 恟り差込む癢。詞とつとモウ悪い時
 所してどうじや其跡は、サアおらだ

けもすんでの事殺さるゝ所、庄屋の
 伯父が駆つて來て、りきんでみても
 肝心の證據なければだゝアは犬死、
 雫子と鷹なりや敵討の勝負もならず
 すごら〳〵、そんだの許嫁の御亭に
 も對面はしたれども、是も此江戸さ
 あへ歸り申す、跡はおらだけとがア
 まとばかり、頼ない身に下地の大病
 ヤアお煩ひでもあつたかいの、シテ
 御本腹なさつたか。イエ〳〵六月十
 六日に悲しや終にお死にやり申した
 ヤア〳〵御養生も叶はなんだか。ハ
 ア、話しさあ聞いてさへ、そない歎
 かつしやる物、じぎに見とらへたお
 らだけが心、エ、コレ、泣かつしや
 るは道理だけれど、頼に思ふ姉さア
 又病氣おこしでは猶か濟ない。イヤ
 〳〵、イヤ〳〵、中々煩ふ様な事じ
 やない、そしてどうじや〳〵。サア
 なじよにもかじよにもおらだけ一人

庄屋の伯父さまが引取つて、奉公し
 ると云ひめすけど、何の奉公所かい
 口惜しいと悔しいで、跡先思はず且
 那寺へかけこんで、詞坂東順禮する
 といふて、笈摺もらひ國元を、つゝ
 走つたもそなたに尋ね逢たら、姉妹
 心一致に仕申して、だゝアの敵が討
 ちたいばかり、道中すがらの艱難も
 そなたにあはふが樂しみに、詞がい
 に苦勞とは思はなんだ、併し逢ふた
 らかつぱりと、しよつ骨が抜けた様
 な、コレそない歎かつしやる手間で
 妹はる〳〵尋ねて、よう來てくれた
 めこがめらしといふてくんさい姉さ
 アと、あやも泣き入る稚氣こころに、長の
 旅路の憂苦勞、思ひやるせも宮城野
 に、つゞくはすゑの松山を、袖に浪
 越す涙なり。歎きの中も姉は猶、妹
 が脊を撫おろし。詞オ、其様に思や
 るも尤も、併しそなたは父母に、長

う添やつた身の果報、此姉を見やいのう、年貢にせまつて、とゞ様は、水牢、其苦を助けうばつかりに、コレ此廓へ身を賣つたを、思ひ返せば十二年、そなたは五ツ子顔さへ見知らず、とゞ様の御最期や母様の死目にも、逢はぬといふ悲しい不孝なはかない事があらうかいの、斯うした事とは露しらず、此妹は健まろなからぬ。とゞ様かゞ様お煩ひでもあらうなら、よもや知らしてたもらふ物、便のないを杖柱、首尾よう年を勤めたら、國へ歸つてお二人に、樂させまして、どうしてと、色や浮氣を嗜んで、勤め大事と許嫁の、殿御の事も、そなたの事も、戀しなつかし思ふのを、たのしみ暮したかひもなう名乗逢ふたは嬉しいが、悲しいはなし聞く姉が、心も推してたものど手を取交はず姉妹が、涙々を立聞く

も貰ひ泣して立わけの。暖簾もぬるゝばかりなり。つもる話は富士の山かずゝ多き涙の隙。詞こんな事聞ふはしか、借て讀んだる曾我物語、兄弟の人々も、終には父御の敵討、コリヤ泣いてゐる所じやないわいのア、是肝心の事を忘れてゐた、此姉が許嫁の夫、此江戸にゐやしやんとの話し、其お方の名所、定めて覚えてゐやらうのう、そりやせはしさに、何も聞かない。オ、モそれを知らぬといふ事があるものかいの、そふいふ事なら敵の顔も。それ知らないでよい物か。目眼のでつかかな鼻のひらたい男ぶり。モウよいゝ壁に耳、御浪人こそなされたれ、由緒たゞしい武士の娘、オ、めらし姉妹じやてゝ、おのれやれ敵討いで置かうか、オ、よういやつた、出かしやつた、幸ひ奥の大騒ぎ、あれに紛れて

此家を立退き、さうじやゝと妹が帯しめ直し我身も共に、小棲かいしよげ身ごしらへ、立退かんとする所を、暖簾引切かけ出る亭主。コリヤどこへ。おゝ旦那様のいつの間に。おりや最前から、アイや、たつた今爰へ来た、が、わがみ達は敵、サアかたい約束の男が有る故、こゝをかけ落、コレわるいぞやゝ、そしてマア其田舎娘を知つて居るか、アイ、イ、エ。知るまいていゝ、昨日淺草でかゝへて戻つたわいのう。旦那様私らが今の話し。サア聞かたでもなし、聞かぬでも。それ聞かれたら赦さぬと、突出す懐劍、さすかの姉妹、鏡臺の、鏡おつ取り丁々はつし。詞や何と違ふた物か、違はぬ物はそれ姉妹ナ、此鏡臺の鏡に移る二人の顔、似たりや似たり、花あやめ杜若、其五月雨のくらき夜に、

敵を討つたる曾我兄弟、假名本の曾我物語、爰にあり合ふこそ幸ひ、おれが讀んで聞かそう、光陰おしむべき時、人を待ざることわり、隙行く駒つながぬ月日重なりて、一萬は十三歳に成にけり。詞ナ此道理、河津の三郎祐重といふ名有る勇者、大名の息子殿でさへ、五ツや六ツの頃よりも、思ひ立たれ親のかたき、なみ大ていの事でなければ討れぬ者じやコレマ聞きや、大名の後室共云はれる人が、曾我の太郎祐信殿へ、二度の嫁入せられたも謀、又息子の箱玉丸を、いとしなげに坊主にせうと言はれたも、敵工藤祐經に油斷させう爲計り、其年月の憂艱苦、詞無念口惜い事の有る條、是迄、何ぼも芝居の狂言に取組んでして見せる繼父の祐信殿も大名、役に立ずの貧乏人と、後ゆびをさゝれたも兄弟の

子供衆に、實父の敵が討せたい武士の意氣地、こりや是陰徳と云ふ大義心、其上鬼王庄司左衛門といふて、伊東家の老臣が有つて、幼少な子供衆に、晝は終日劍術稽古、夜もすがら机の上、忠孝の道を教へ、成人の後に及んで、兄貴を十郎祐成、弟御を五郎時致と名乗らしたも、北條殿といふ烏帽子親が有つたさかい、近いたとへは、おれが様な不粹むくつけな親方じやと思ふてもるし、こつちも又抱の奉公人じやと思へば、何事によらず引けを取らしとむないア、こんな事は言はいても知れた事じやが、今の様な話しを聞けば、おりや見遁したい、コレ爰をよう聞きや、首尾ようそなたが逃果てたらが、悲しい事は遠國生れ、しつかりとした心當もなうて、江戸中をうるつきやるを、内人の者共が見付、

何所そこにゐますといふ事を聞いてア、ゑいわい打捨て置けとは、親方の身でどうもいはれぬ、そりやモわがみ達計でもない、此廓へくる奉公人に親孝行か、夫のためでない物は一人もない、あれも孝行じや、これも貞女じやと、それなりけりに仕廻ふては、こつちもおやま商賣取置かねばならぬ、おれに成人の息子でもあつて、抱の新造呼出したり、色狂ひに身を打つと聞けば、ヤイ極道めぼいまくつてのける、勘當じやと、強意見する親の身が、人様の大事の息子殿が見えると、きやつ放錢じやわいの、コレ頼もしさうなお客じや程に、随分大事にかけやと、智恵を付ける、マ此様な得手勝手な商賣はなけれど、こりや是浮世の身過世過、さういふ身分な此おれでも、慈悲と情といふ事は、不斷心に忘れはせぬ。

まちよつといふて見様なら、此宗六は最前いふた、鬼王庄司左衛門じやと思や。外に烏帽子親の北條殿といふ様な、後楯でも出来てから、ヤさつきの様に思ひ込んで、突かゝつた懐劍、おれにさへつゝい擲き落される様な事では、まさか敵に出合ふた時すつぼんの間にも合ぬほどに、おれいふ詞に隨がひ、コレコレ此道をも稽古して、鍛鍊を熟した上では、ぐつとぐつ尻持つ合點。コレ駈落の尻もつて行かふとはいふまい、急く所ではない程に、大事の勤め、駈落しようとは無分別、お客大事に勤めてたも、合點がいたかと、つどぐに、曾我物語の引くより、讀切講釋一方を、頼もしげある亭主なり。二人は飛立つ 忝け涙。身にも胸にもあり餘。エ、ありがたう御座んすと、姉が拜めば妹も、只伏拜む許りな

り。詞オ、嬉しいのは尤も、義を見てせざるは勇なし、わがみ達の様な奉公人見立て、召かゝへたといや、仰山なが、おれが目鏡もおよそ禮はぬ、禮いふ事も何にも及ばぬ。ノ是人の目鏡に悟られぬ様、随分共けはひ化粧も美しうして奥の座敷へ、ソレ遣手の政はるぬか、湯をもつて来てやれいやい、しげりはるぬかと呼出して、言ひ付るのも賣物に、花も實もある轡の宗六、生粹の淀まぬ座敷は大騒ぎ、牽頭末社が弾く三味に乗つて呑むやら諷ふやら、現たはひの喜見城、意見上手の親方が、こもる情に宮城野が、妹を部屋に奥座敷引別れてぞ、三重入にける。

新 舊 大 合 同 劇 二 替

十月三十一日初日

毎日 ヒル正午 二回開演
ヨル五時半

尾騎紅雲原作
 川村花菱脚色
 中井泰孝演出

第一 金 色 夜 叉 五幕七場

原 綴 作
 高屋貞澄演出

第二 菊 の 葉 一幕

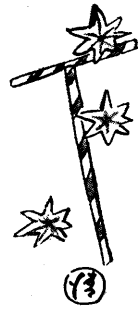
岡本綺堂作
 豆瀬 互演出

第三 小栗栖の長兵衛 一幕

御 観 劇 料

一等席	一間八十錢
二等席	(小物料共) 八十錢
一等階	五十錢
椅子席	(他二入場税一割)

どうとんぼり 角 座



紅葉狩の段

腰 山 鬼 維

元 神 女 茂
 竹 豊 竹 竹 豊
 本 本 本 本 本
 越 英 相 瀨 相
 名 太 瀨 太 生
 夫 夫 太 太 太
 夫 夫 夫 夫 夫

琴
 鶴 野 豊 鶴 野 野 野 鶴
 澤 澤 澤 澤 澤 澤 澤 澤
 網 勝 仙 龍 清 吉 八 喜 重
 延 芳 松 市 友 季 造 之 助 左 造

紫紅山人調
 鶴澤重造
 藤間 壽右衛門撰付

新曲 紅葉狩

本曲は紫紅山人の作詞に鶴澤重造が節付けしたもので、此度、初めて舞臺に上すことになつた。その筋は、余五將軍平維茂が信州の戸隠山に紅葉狩の折、美しい貴女の一群に出會ひ、勸むるまゝに酒を過して睡ると夢に山神が現はれて鬼女にたぶらかされて居るのだと告げるので、眼をさまして鬼女と戦ひ、小鳥丸の威徳で鬼女を退治すると云ふ一幕物です

(床本) 新曲 紅葉狩

の草の露分けて行方も遠き山陰の驗しき道を辿り來て、ア草木心なしと雖も春は花咲き秋は梢を染める山紅葉色とりどりの唐錦紅の一葉は烏帽子の上黄金の色は袖袂すれつからみつ散りかゝる落葉の色に飽きもせず歸る家路を忘れじと暫しぞみ居たりけり、テ心得ぬかゝる深山路殊に日も早や傾きしに何所の誰が手づさみかいたも床しき琴の音の主は如何なる人ならむ、審しきよと見廻す彼方紅葉の木の間に幔幕の張りしは高位の方なるべし、興妨げんも不躑けと道を隔てて過ぎ給ふ、ナウウ、賓人暫くと聲打ちかけに更科姫、暮より出づる、白菊の香り氣高きなりかたち、こなたは思はず振り返り待てとお止めなされしはやんごとなき御方なるか問はれて姫は手をつかへ、思ひも寄らぬ深山路に女計りの紅葉狩

人形

平 維 茂 吉 田 玉 幸
 更 科 女 桐 竹 紋 十 郎
 實 八 鬼 女 桐 竹 紋 十 郎
 腰 元 重 野 桐 竹 紋 太 郎
 腰 元 靜 野 吉 田 玉 男
 山 神 桐 竹 紋 十 郎

嘸醉狂とも思し召そふが此の戸隠し
 のもみぢ葉の錦と紛ふ此景色、獨り
 樂しむ本意なき、あなた様にも御一
 緒に御覽じなされ下さつたら有難う
 存じますと言葉やさしき女郎花、露
 に色香やこぼるらん、ア、イヤ折角
 の仰せなれど男女七歳にして座を共
 にせずとの世のたとへ御縁もあらば
 又重ねてと行かんとするを引き止め
 アモウシ、時雨に急ぎ給ふより一樹
 の影に立寄て俱に樂しむ菊の酒、濡
 れて色ますますみぢ葉の淺き契りを末
 迄も遂げたさ故の我思ひ見捨て給は
 で諸共に深き山路に鹿ぞ啼く妻戀ふ
 聲の身に染みて一層思ひは増鏡、曇
 らぬ内を今暫し休らひ給へと夕映へ
 の紅葉恥らふ其風情岩木ならねば雜
 茂も心動きてたゆたいつ日も黄昏に
 近ぢきて歸館に心急げども見渡す山
 の夕紅葉又一入の風景に暫し名残り

を惜まんと仰せにいざや腰元が案内
 に姫も引添ふて連れ立つ足はいそい
 そと散り布く落葉菊の花秋海棠の色
 深き道踏み分けて維茂が猛き心の置
 く霜と共にまどひの苔庭胸も燃へ立
 つ毛氈に運ぶ盃銚子、酒心嬉しき玉
 箒人の情の盃も數重なりてうつとり
 といつか隔ても中垣に並々ならぬ此
 名酒思はず銘酎致せしと又もさゝる
 盃を手に取り上げて打ほゝゑみ此大
 盃を呑みもせで波と受けたる維茂に
 さかな所望と仰せある、腰元共は口
 々にオ、それ〱其おさかなにはお
 姫様日頃のお稽古おさらへに一さし
 お舞ひ遊ばせと勸むる詞姫君は、拙
 きわざも殿御への心のたけを萬分一
 おはもじながらと立上り敷島の三つ
 の景色と歌人が霞と共に杖を引く一
 ト目千もとの三吉野や花の盛りによ
 そへてし越路の雪の降りつみて見渡

十一月一日初日

毎日午後三時開幕

第一 温泉紅葉 二場
永田新吉作並演出

第二 斷髮女中 三景
斷子文六原作(オール讀物所載)
伊田和一脚色(演劇新論所載)
金子洋文演出

第三 海の星 二幕
八木隆一郎作(舞臺所載)
村山知義演出

第四 小梅と一重 二幕
伊原青々園原作
眞山青果脚色

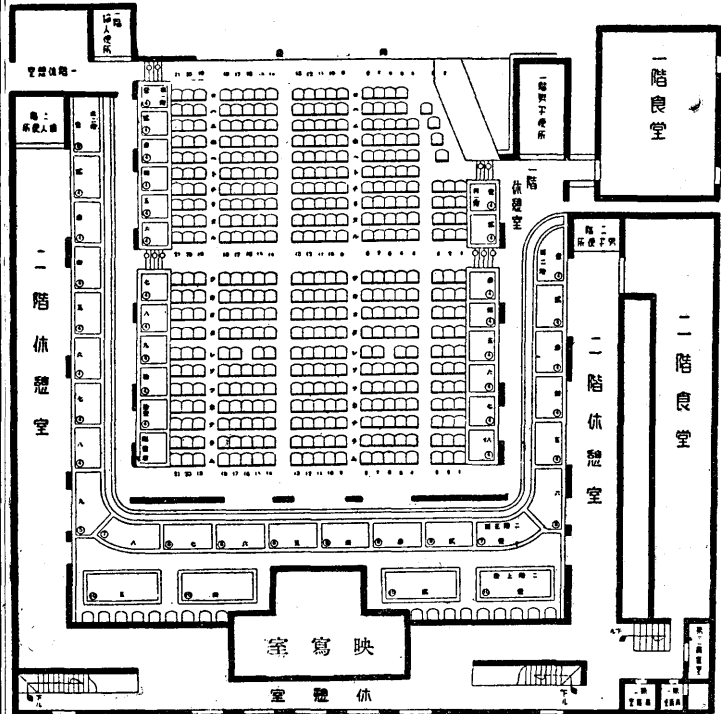
第五 渦 卷 四幕
渡邊禮亭作
川口松太郎新脚色並演出

観劇料		
一等	二等	三等
六十一錢	四十五錢	四圓五十錢
(他二入場税一割)		

大阪歌舞伎座

す限り白妙の木曾山越へて更科の木々の梢も紅葉して山を望めば山姫の手織なせる唐錦柞の森や木の蔭の小倉の山の風景は外に類ひも嵐山流れの元はいづく共誰白菊の咲き亂れ波みて香を知るくすり水さす手引く手もいつしかに夢ばし覺まし給ふなと云ひ捨て奥へ入相の夢かうつゝか維茂が酒の嬉げんにうとゝと結ぶも早き秋の暮、夜嵐寒き山蔭に現はれ給ふ神童の白衣のみ姿おごそかに如何に維茂汝無明の酒に酔ひ臥し此所にある事危ふしゝ一時も早く疾く起きよ我は八幡大神の命に依り假に姿を現わして弓矢の道を護るなり、疾くゝ目覺め立ち去れと持たる杖をつき鳴らしゝ吹く風と諸共に搖き消す如く失せ給ふ夜風身に染む維茂がムツクと起きて四邊を見廻しアラ淺ましやゝ我無明の酒に魂を奪われまどろむ中に神夢の告げ扱は今まで姫なりと思ひ詰めしは正しく鬼神、イデ本體を見届けて世の災ひを絶ち呉れんと突立ち上る折しもあれいと物凄き山嵐風にヒラゝもみぢ葉の影にスツクと異形の姿さてこそ悪鬼でありしよな、オ、サ女と化して汝等の命を奪ひ先つ頃大内山に相果てし我眷屬の鬱憤を晴らさんものと思ひしにエ、口惜しや、汝が所持する名劍の威徳に通力破れたり、イデ此上は汝をば我隠れ家へ連れ行かんと襲ひかゝるを事ともせずきらめく雷維茂が武勇勝れし太刀捌き悪鬼は炎を放ちつゝ秘術を盡す有様に紅葉は火の子と飛びちがふ咸陽宮の烟りの中刃鋭く無二無三切りかけ切り伏せ維茂が忽ち鬼神を滅ぼせし劍の威徳ぞ。

文樂座御劇場席案内



御、觀覽、席は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前、賣、切、符、壹、等、席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます御用命の節お呼出しの電話は
南四七壹壹番で御座ります

切、符、賣、場、右、指、定、席、切、符、は、當、日、前、賣、と、も、正、面、西、側、本、家、入、口、に、て、發、賣、し、て、居、り、ま、す
二、等、席、三、等、席、切、符、は、當、日、正、面、入、口、に、て、發、賣、致、し、ま、す

觀賞おほえ

昭和十四年十一月 日

伊賀越道中双六

碁太平記白石噺

新曲紅葉狩

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場でゐります。

文樂座人形淨瑠璃は 常に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。

従つて開場毎にこの大使命が全う出来ますやう、皆様の御期待に反かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが、尙御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座います。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しますから成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お煙草は 一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座居ます。

賣店は 二階東側と一階西側休憩所に御座居ます。

お化粧とお手洗 殿方は西側の二階と二階に、御婦人は東側の一場内にて 寫眞撮影は絶対に断り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座居ます。

お出口は 下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號入マークを付けて居りますから御用の節は御申附け下さい、其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから豫め御諒承願ひます。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問、各種團體御觀賞會、又は諸種の會合席上へ出張公演等御相談に應じよろづ、御案内申上げる事に致しました。御一報次第登壇、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑦三七七八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十四年十月卅日印刷 大阪市南區久左衛門町八番地
昭和十四年十一月一日發行 發行所 松竹株式會社大阪支店

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店內
編輯兼 鳥江鏡也

大阪市西區土佐堀通一丁目十二
印刷所 永井日英堂印刷所

一部 金二十錢

文樂座南一食堂

御食事の御用は一幕前に御下賜
はれば至極御便利で座すまい

大坂四ツ橋

南温泉料理

御宴會にも
御家族連にも



電話南 75

—	—	—	—	七
三	三	三	三	〇
—	—	三	三	—
四	三	二	—	—
番	番	番	番	番